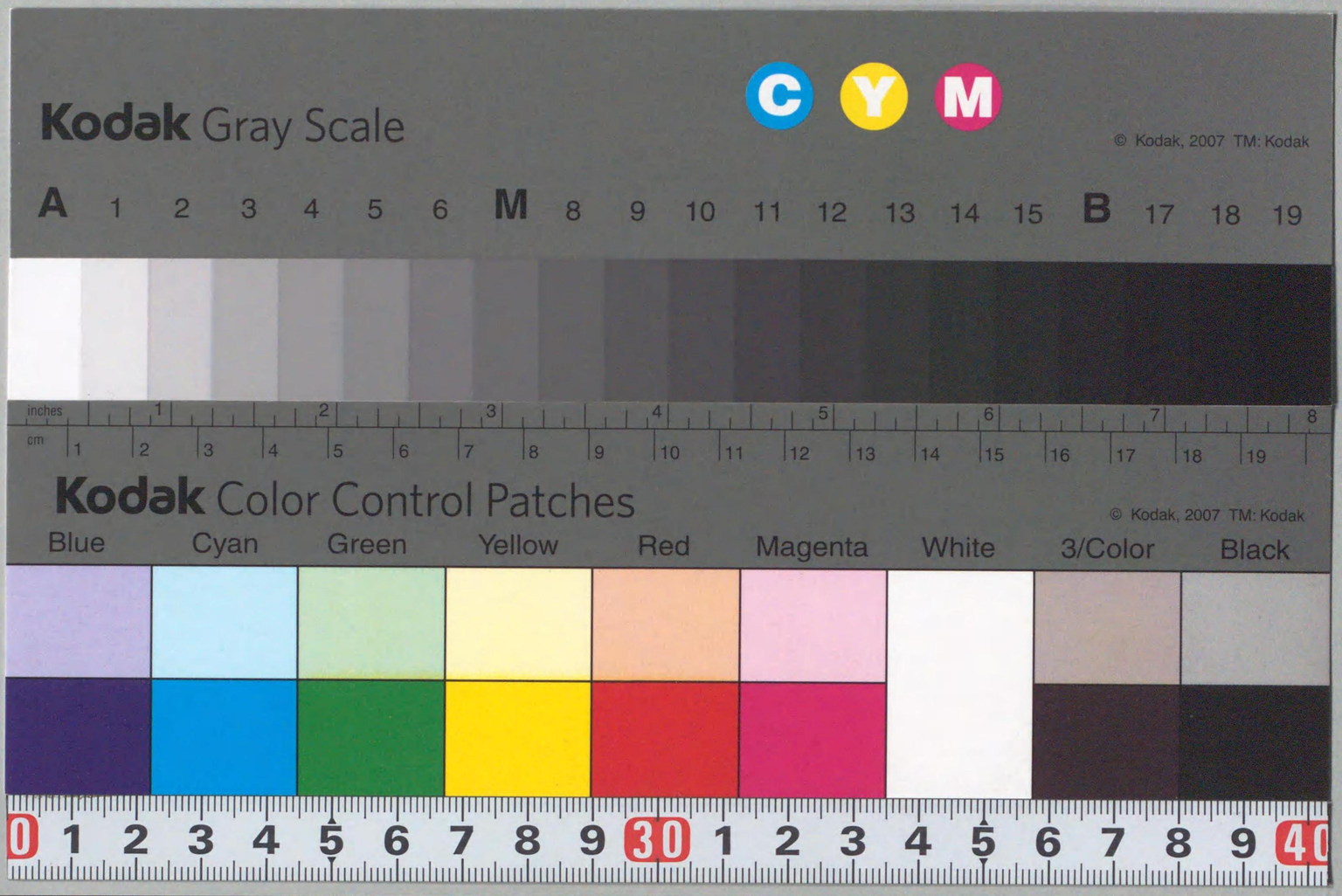

增補雅言集覽

一

813.6
I619g
Nm

813.6
I619g
Nn

石川雅望集
中嶋廣足補

增補雅言集覽

版權所有

中嶋氏藏版

国立国会
41.3.31
図書館

691317

吾國語言一字一義五十為言而五十義獲矣五十言互相交互錯綜往來各積數至於五于斯一萬語之多由是以往或假借或轉換用法各有清濁二韻為義弗尠若夫

上聲下聲之為用翻上唇而
覆下音皆下聲抽下唇而向
上音皆上聲夫天訓阿兔之
上聲讀而兩訓阿兔之下聲
讀理敢然蓋天在上而由下
仰者兩則下降也有亦去聲

訓讀之法有亦入聲讀訓之
法入訓伊留卷舌讀聲由外
入出訓伊豆留急聲呼伊豆
留音由內吹出也上唇下唇
開合平對則出平聲欹側鬱
左右向者常反聲肥後某紳

著書釋語例類ニ是矣未知
與余斯論併着若何維年癸
未書于東都靈巖島僑居
副島種臣

[illegible]

明治十五年十二月

權大教正 本居豐穎

田所[illegible]

[illegible]

祖父[illegible]

[illegible]

[illegible]

故石川雅望[illegible]

[illegible]

[illegible]

凡例

一此書に出しつる雅言ともは、延喜よりこのかた歌にも文にも用ゐなれたる詞ともなり、ちかき世となりて、あやしく耳なれさる詞ともをとりましへて、文なとつゝる人あれとさるはいとしきひかことなれも、こゝにいさやうのたくひいうちはふきて、用ふへきかきりは詞をのことり出てゐるしつけつ

一雅言いよくあちもひて我もはとせされい、用ゐさまたかひて、大にあやまることあり、たとへはそゞろかといへるい、人の身はさけたかきにいへる詞なるを、そゝろといへる詞にはなし意なりと思ひあやまれるかことし、此さくひあまたあれい詞の例ともをあいせ見つゝ、よく〳〵思ひえさらんには、一歩千里のたかひとやなりぬへからん、されはおゝにいとな人の常にいひなれてあやまるましと思もるゝたくひをさへ、わつらもしきまてとりならへさるは、なか〳〵に、ちかきおとのまかひやすく、俗にいふうもすへりの誤りといふことのなからむさめにとてなり

一張數い源語い湖月抄によりつ、其外も流布の本の張數をもてゐるしつ、こは本書を引いてん時便りよからんさめにとて物しつるなり

一鳥獸草木れさくひは、雅言も俗語もともに同きもれやかぞ、あれらい、くもしう
せんもふようなれは、こゝにいさゝ、大あたをのゝ物しつ
一引出さる詞ともい、見るまゝにうつしとりつれは、引書の前後せるも、又その出
所をとりおとしたるもありぬへし、こきら今一さひ挍合もせへかめれと、よろつ
もろうきゝさきにたて、いさなあらにしてやみぬ、おとたらにとや人いふへから
むあし

追　加

一原書に掲たる詞ろ中にもれさるを補ひたるい其所の首に補の字をおきまさあら
たに増加へさる詞には二重の畫をもてましるしとす

雅言集覽序

石川雅望といふ人ろこのみやひ言あつめしめされさる巻ろはしめを見れは古事記
日本紀れ御典をもしめ萬えふ古今六てふ夫木の代々れ歌巻うつや竹とぞくゑんし
榮花とくさ〳〵の物語ふゝとも大ゝさ雅言のあゝしとせへきかきぞつみいてえり
いてゝいひろいはとうるもしくついてもさいろにいろ〳〵のいろあるたくひなと
うひ學ひの人々いゝにまともしきもれにすらんと思ひはかりてこれはしか〳〵の
こゝろそなとわき〳〵しくいもれさるしるへことゝもゝないもれたることにてい
あに〳〵とたれもたとらんふし〳〵大ゝたしるしもらされさることなくたとりふ
ゝく物せられたるそのいたつきのほといたつかはしくなむいてやかゝる詞のしる
へふゝいとしころれのれもおもひよれることなれと今さしあたりていそく筋れ
ゆめゝたきにひゝれていてやとれもひのとめつゝ今さりともちゝきやとにいとす
くしゝほとに此ころおなしたくひのそこにもかしこにも海山木草鳥虫とぞくるも
ありさにさへもらまさまさきなとあつめつらねて詞の意考へやすかるへくまめや
かにいそしむなるもあるはまめやゝにいそしきことゝ思ふやとに此石川の春の氷
れとき言なんまつ世にあらもれいてけるさるいついてさまもあつめさまも心々に

てれもひとりさるかたことあれはこれもゝれもいふへ學ひの道れあるへいとり〳〵に淺からぬ功いたつへきをまつ咲いてたる浪の初花世にめつらしくれそゆるまゝにあそしもえあらねはなそゆく末遠くなゝれてたえぬそきことそへてこれゝもしかきとに此ふみ板にゑりてこゝろミにもりたるもしめのほと十ひらもあれ見せにおこせてれのゝ一ことをとゞまつたへいひおこせたるに此紀の國ちゝき阿波の國人遠藤春足なりかくいふは本居大平

なにこともあゝれる世のてふりをあたふことにこのもゝとせあまりれ昔しよりそはしまれさるさるによゝをふるまゝにひとのことさたゝくさりにくたりゆけもをり〳〵にあらさめたゝに人のいてくるゝかの天運とあいへらんさゝまれる世れたうまなるへしされとあまれにいにしへこのむとてゝへりてひかさしいつるたくひももさおそくいてくるそせんゝさなきやから國の聖れ道も唐虞よりあもつゝさをそむねとにとかれさるを猶あひてそれかゝミをあなくりとうてゝいふなるはあなゝちなるわさにてきもめて人のさめ益なしとそ世にもいふなる身をゝさむるみちすてにかゝまして文才のゝさなとにそのよゝにちゝきてふりれたゝしくてもさいにしへにもゝよひぬへきすちをこそまねひとりぬへきさなれされはかな

さにも詩は李杜を親とし文に韓柳を師とはするならひになんさるをちゝき世れいにしへこのむといふ人に歌に万葉のもゝさをうつし文をもそれになすらへて祝詞宣命まさ國史の訓萬葉のことをとりあつめてそかきつゝくめる歌に猶さもしつへし文のかたはあありさる世には祝詞宣命をれきてにおそやけわさくしとなくよろつから文にそものせられたるかの祝詞宣命にくちつあらのたまへる事をさなからにあきつらねたるものなれはおれつあらひとつのさまにしてこちさき事にも寫にへうもあらぬことにいふもさらなりそも弘仁の頃より歌のさまいにしへといふさくかもまて女ふりにのミなりてもしことも拔もかなのもしにものせられしよまなにくれの序日記なとやうのもれもいてきて今のゝんなふみてふ事にはしまりさめるを今の世にいにしへれふりとてためしなき文をしもつくりいつるはいゝなるこゝろにあこれはそのもしめものしそめつる人にみつからもあらぬささとはしまなあらかの古文辭とゝいふらむふりなとにれもひよそへてたゝ人のめれとろあさむとてそあいてつらんをつき〳〵のそれにならへる人はこれそまことれいにしへふりなるとれもひてひさもらそのあとをのミふみつゝあやしきことをのミえりいてゝかきまきらもしいともそへなきをり〳〵にいにしへには見もしらぬ

ことをしもあらさにふるめりしくつくりいて、さしましへなとをめるハ先いにしへふりハおきていとちりき世のわろきふミかきにさにさハせぬ己さなるをれもひもわきまへさるそいといふりひなきやれのれ此事をれもふからにミつあらふみあくにさハいとつさなけれと常になりつ世ハ文詞をのミとり用む事を心にしめつゝその世ハ文の法を考つゝさるをちの事こゝらなにくれとかきあつめおきつるりもし世にれなしこゝろさしなる人をやあるとをし頃れもひもとめつれとえゝになりにしを近き頃江戸なる石川の翁のかゝれし文を見しになりつ世のふみこともをよくまなひうつして今のよにはいとめつらしうをりしきすちとれそえしりはこれやわりもとえつるたをひなると先おのれりかきおきさるふミらひとつふさつ人つてに見せしりは翁いとよろこそひて千里のそりに友をこそえされとてやりてかへまことせられき翁ハ己かきそとよりからハやまとの文ともあまさよみてとしもいまハむそちにもやゝあままたれも江戸ハさらなま都なにもわさまにも和學すといへるきもにはたちならふ人ハをさ〳〵なりめれと常にたもれをにさちましまてされ歌よミなとして世の人のやうにほこらもしきおもゝちをもせられねハたやをきやうにのみれもひとれるきハのいとれそきをおのれハ此翁をおきてハふミなと見せあもれへき人ハまさ世にあらしとれもひおきてはれハそれゝちハをりにふれてハこの翁にそかきすさミさるものをも見せてことものよしあしをもとひきゝぬるされとさりひいともるりにへさてつれは鴈の便もおそつりなき残り〳〵のあれハいりてこの翁ハなりつ世の文詞なとかをつめおきけんものゝあらはかりえてみましさてこそをたしくあひミるこゝちをせめとつねにれをひわさりたりしをさいつ頃この雅言集覽のことつけおこされしにこそとし頃の本意かなひぬるこゝちせられしりこさひまさ板にゑりぬへしとておのれにはしかをさへこもるゝそうれしさいもむりさなをやゝりて其まを〳〵をひらを見れもたゝなりつ世の詞をもらさはりきつめしのみりはくさ〳〵のちうさくをさへくもへもさ近をよにとをあやまれる事ともをさゝしなとけにこれ翁ならてハかゝるにさハえものをましうそおそゆるあもれこの文ひとたひよにひろこまなはかのいふりひなきゝももおのつからまことの文詞をしりてあらぬひりわさをもあらさめぬへけれは翁のかゝるいとなミもみちのためいといそしくやことなきこうとそおそゆるあもれこのふミをハなあきよのたあらともはたいもさらめやハ文化九年八月源興詩

言たまのさをもふ大御國にしをうまれて其ことれもと我しらはかんなの亂にたる

ろかしこき下をて歸りのほきる便ま此書を見せてそらはしまま只一言添よとねもおろまこそる、を野中の清水ぬるからにもとの心をふかく識ぬれはいなひらてお老のめお目かねをそへて燈れもとま筆戎とれるまなん賀茂季鷹

ことさへくから國ハよろほのことを鳥の石とまうつしてをるしとをる國をきはもやくの代より書といふ書の千巻八千巻世まれをかるもさることまなむ師本志滿の倭の國ハ神おのら言舉せぬ安國まて萬事すくなまいひつたふるのみなをはいとも上つ代まハ文字といふものもあらをてなんありけるさるを輕島の明宮まて天の下をろしをす、天皇の大御代まて玖陀羅の國より和邇吉師といふ人れそしめて此ふみといふものもてまゐりてそをこゝの言もてよみおらはしたまひしよをこゝた我くまゝもあまねくこゝををとりもちふる事となりつゝ今ハ彼から國おもをさ〳〵れとらぬまて其書といふものなん世まおそくハいてきまけるそは古事記日本書紀おともろ〳〵の國史をましめとして家〻の記錄世され哥集くさ〳〵の物語何の双紙くをの日記なと巻々おしてこををとくことといとかたくこれをよむおともまたやをのらにおんありけるされも世れものをそ人たちあるは國史まふのくこゝろをいをてふることとの心をときあらをあをはもの語ふみまもそら心を

そもさきまへに物ろれ謂よむ人中むらしよりむ糸と有人とらまするら多このをしら城も、とせあまりをちつ方難波の契冲あさりの樂れ葉の名まれふ萬葉のあら山中まわけ入て宮木くぬ木のもとうちれり末打たちて大みあらゝをも造るへく賤ゝふせ屋をも建つへくおしゝを山口まして神風の伊勢れ宣長千もやふる我賀茂の眞淵のをちなと春の田れをき〳〵まて貴のおをもて創らひとくきもてみゝれあとせしハ古をあふく人とらのこよなきさちあらにやさきと其宮木ハ山高く道さゝしくてうひ學の人れたも安く得ゝてまにおるを此頃大江戸なる六樹園の主その木れ柱ますへくけたますへれを木たくそのをみ壺の墨を竹筆まうるほしてをるせらんことく色葉のかんなもてついて筒雅言集覽とおむ名付て木まおらせしハ兒處女子まてもとみまみ見出て石上ふるれ歌をも言をもしをふん屋をも造らしめむ爲ならをや抑此翁のされ歌まと名ゝろける事今天の下まて誰ゝハおらさらんされとたゝまさき歌まのそ名あると知て言さへくから書をひろく見そらそつ倭れ道々しきふそらを始てふみてふ書をくまなく見あきらめられしハ此書を見て知人もあらんゝし季鷹彼あさりま住しハまたいとわゝ、をしゝ此翁のさえの廣ゝる事ハもやう知まれとかく海山をとをくへたてぬをはおのつゝら雲井のよそまして來けるまて此頃難波人梅干まろ

もちゐまきりちうさくをものまるも有あるは哥書におもひをくたきそれりこゝろをさとせるものまは何呉れ書をよみかうりへて其あやまきるふし〳〵をたゝにもありてこも又いくそもくそといふこと故しらにかんありけるまゝに我六樹園の大人のあらはさきさる雅言集覽といふ書をよみ見るに彼國史よりしもあらゆるもろ〳〵の書ともの中なる雅言のりれをこと〳〵くあつえついて、其心をさへ淺茅原つもら〳〵にとれ菅の根れねもころにしるさきさるはかのくさ〳〵の書ともをよむにもまさみつから文なとものせんにもいとも〳〵便をよきしるへにて明くきこやひにこゝろよにる我ともかられためにはこのからふみまねひに常にもてもやもめる字彙とり字典とりいふ書のたくひにしてふつくゑのかさもらはかつましき書にかんありけるおのれもやう本居の大人にかつきをおくをて言れ葉のもとつ學に心さしはさつねにもはらたれれたるかさにあそひて石川の大人れなりれを汲家をさのいとま〳〵にはしさしき人々をもせゝめいさかひつゝとし頃いこてかゝるふみもこなとれもひわさをつるをこたひりくこやひさるもちの書をしもあらもしたまひたるはけに世にありかされいさをとそいふへれさきも此翁をたのこて物せんにはから國のふこやまかひかん又我國ふりれことのもやならひかんそれたゝ

しさりひまなふ人々れ心のまに〳〵いつきの方にもまさなきをしへのれやとこそまをにへけれかくいふは阿波國人遠藤春足

むりし唐士れ趙の國にめてたき玉あを連城の玉とかんいふまさ車十二乘をてらせはとて照乘の玉といふありいはきもいとあをかさき玉になんありけるこゝに六樹園れ翁はかれ卞和氏の楚山といふ山の岩村にましをたるを見出けむことくひこをある言葉の玉を見顯さんととしまろ千尋れ底の深きこゝろに伊勢の海れ清きかきさに下りたちてかれ集えさるまゝらの卷ともを雅言集覽とそなつけゐるまれもさあさひなき玉にもれとらにいとめてたき玉かきと櫃に納めてむめおきたる故佛の道にいひつさへけん衣のうられ珠の光れはゝめともあらもるゝ物なりけれは此程其ひありれやゝみえそえぬるこそうれしけき我れ賈をまつものかりといふしへのひしをものさまひおきてけるをいこて其ひこを世にひろく照かゝやこせむとれもふまゝにおのれこひうけてさくら木にれゑらせつあれこのことれ玉よかけまくもかしこきもめらみことの御代〳〵の御しるしとあふき給ふ八坂の勾玉のことく千代よろつ世の末りけて大八洲のうちひらけとひらけたる文の林もまさたと〳〵しきまろらをもしめ初まなひの人々常磐にかきもに此ひありを蒙らさらむや

ハさるハいミしき世のたゐらものふしあれはゝの照乘にも立まさるへきものそこのゐまのひゝりは源剛

増補雅言集覽巻之一

石川雅望　集
中島廣足　補

○以の部

い 寐（古事記）上卅三 伊遠斯那世（繼体紀）八 于魔伊禰矢度儞 **いの**（万葉）一廿七乙麿「やまとこひいのねらえぬに心なくこのものさきにたづなくべしや（同）八廿六（六帖）五（拾遺）夏大伴坂上郎女「郭公いたくななきそひとまゐていのねられぬにきけバくるしも（詞花）雜上「れもふ事侍りける頃いのねられも侍りけれバよもすがらながめあかして 赤染衛門歌云々 **いを**（古今）戀五「夢にだにあふ事かさくなりゆくハこれやいをねぬ人やこするゝ（躬恒集）「あハぬ夜もあふ夜もいをしまだねゝバ夢のたゞちハあれやしぬらん（六帖）三「淀川のそこにもまねどこひといへバもべていをこそねられざりけれ **いをやもく**（新古今）夏家持（家持集）（躬恒）「郭公一聲なきていぬる夜ハいゝでゝ人のいをやもくぬる いゝでゝハ人（家）ねん（躬）（夫木）卅、後法性寺入道「まバらなる田庵にもこがいをやもみ月にもらしていく夜あゝしつ **いも**（土佐日記）廿日云々いとこびしよるハいもねじ（六帖）六下（打とけていもねられねバ郭公夜ふゝき聲ハこれのミぞ

きく補（新古今）春下躬恒「いもやせくねられざりけり春の夜ハ花のちるのみ夢に見えつ
つ いやハ（拾）戀二「君こふる涙の氷る冬の夜ハ心とけたるいやハ祢らる、いこそ（拾）
夏「五月雨ハいまそねられね郭公夜ふかくなかん聲をまつとて（道濟集）「よのほ
どに咲やしぬらん床夏の花のさかりハいこそねられね いだに（源氏うつせミ）七ゆ
やしく夢のやうなる事を心にもなる、をりなき頃にて心とけたるいだにねられぜ
なん やせきい（竹とり）よるハやすきいもねぜやその夜ふもこゝかしこよりのぞ
きかいまみまどひあへり 旅のい（拾）物名、石柳輔相「旅のいハやなき床ふもねられけり
草の枕に露ハおけども ねられぬい（榮花見てぬ夢）卅三いもねられでひとりでち
けるが「夢ならで又もあふべき君ならばねられぬいをもなげからざまし（詞花）雜下
よも相如 あさい（源末つむ花）十九こよなき御あさいかな猶 あの部に出しつ
い 蜘蛛の網（かけろふ日記）「露にても命あけたるくものいふあらき風をだたれ
らふせがん さゝがにのい（元眞集）「さゝがにのいらませよとあさが戀のたのもし
げなきそらにしのぶる（後拾遺）戀三馬内侍「くもてさへらきたえにけるさゝがにのい
のちを今ハ何にかけまし（同）戀四元輔「さゝがにのいづくに人ハあるとだに心ぼそく
もしらでふるらな（同）雜二、和泉式部「そらにある人の心ハさゝがにのいかでけふまさか

くてくらさん（千載）長歌俊頼さゝかにのいらさまにてもらきつらん
補 い 助字上古語の下に付て云い＝よて歌にも文にも多し宣命にもあり（万）九ノ卅六長歌云々おくれたるうなひをとこ伊あ
めあふぎさけびおらひ云々（同）十二卅五ありちがたありなくさめてゆらめども家なる
妹伊いぶらしみせん後の歌にもあり（定頼集）物名やいこめあなうやい＝こめてぞたゞにやみな
ましかくつらからんものとしきせば
いろ 顔の色をいふ（榮きるハさびし）八御色ハ雪もづらしうて補（宇治拾遺）二女うちみるま
まに色をたがへて 顔のいろ（源をとめ）廿三宮けさうド給へる御顔のいろたがひて
御目も大きになりぬ いろに出（万）四ノ四十二「足引の山橘の色に出てかたらひつきて
あふ事もあらん春日王（古）戀三友則「さが戀を忍びらねてハ足引の山橘の色に出ぬべし
（拾）戀一兼もり「忍ぶれどいろに出にけり我戀ハ物や思ふと人のとふまて いろに出せ
（源きりつぼ）廿なか〳〵あやふくおぼしもゞかりて色にも出させ給もぜなりぬる
を（同せきや）四もこし御心おきて年頃ハおぼしはれど色にも出し給ハぜ（同こてふ）
廿四色に出し給ひてのちハおぼたの松と思ハせたる事なくむづらしく聞え給ふ事お
ぼられぜ
いろ 髪の色のうつくしきをいふ（上生經）云慈氏髪相紺瑠璃色 いろにて（源竹川）十五御ぐしいろに

て柳の糸のやうゐたを〳〵とみゐ（狭衣）三上十九髪ゐ少〳〵いろ〳〵てこちたうゐあらゑさゞらゝゐるさゞりゞゐなどあてやゝに（榮きるゐゐびー）八くろきひとへの御ぞに御ぐ〳〵ゐ御ぞよりゐいろゐていとこちたくゐあらでつや〳〵と御ぞゐたまりたるゐど**いろある**（源椎ゲ本）四十いろゐる糸をよりかけたるやうゐり（濱松中納言物語）四髪ゐそこ〳〵いろゐるゲ筋もこえゑこまでまと翡翠ゐどいふらんやうゐひろでりかゝをていとこちたくゐあらゑ**いろぎぬ**（うつゐ國ゆづり）中二これもいと花やゝに鬢つきいろぎむゐどいとめでたー**いろ**好色の意俗ゐいふァダ**いろある**（いせ物語）一六十段（拾）雑戀業平「染川をゐたらん人のいゝでゝゐいろゐあるてふことのゐゝらん**いろある**（後拾）秋上、堀川右大臣「をみゐへーかげをうつせば心ゐき水も色ゐる物ゐぞありける（源うきふね）四十九此宮のいとさゐゲー きまで色ゐおもーまそゐれば心ゞせあらんゐかき人さふらひゐくげゐゐん（榮花山）廿八御心おきてもいみゞういろゐおゐゐーまーていつーかゐさべき人々の御娘どもをけーきたちの給ゐす（同根合）廿六冊またきより色ゐおゐゐーまーてゐのびありきいみゞうせさせ給ふ**いろある心**（源ゐげまき）六十三猶音ゐきく月草のいろゐる御心ありけり**いろある人**（散木集）中廿五いろゐる人のゐたーき人々をかぞへける**いろある娘**（うつゐ藤原の君）卅九をのこどもゐゐみて**かぞのいろ**（夫木）廿七藤原爲顯「花をみる道のほとぞの古狐かりの色ゐや人をよふらん**かれるいろ**（同）定家「つゝふるき狐のかれるいろよりもふゝきまどひゐそむる心よ**いろ**五色のいろゐりこきうそき万よゐたりていへりことゞく抄そるよいとまゐらず（更級日記）山のそゲたの紺青をぬりたるやうゐるゐ雪のきゐるよもゐくつゐりたれゞ色こき衣ゐ白きゐゐめきたらんやうゐみえて**いろある**是ゝ殊ようつくーきをいふ基俊の聲ようけ好色をゐかねてよめり（千載）秋上基俊「宮城野の萩や牡鹿の妻ゐらん花さきーより聲のいろゐる（同）同俊頼「あそもゐん野路の玉川萩まえていろゐる浪ゐ蛙ゐくゐり**補いろてる**（曾丹集）「たくひれのさき坂岡のつゝト原いろてるまでゐ花さきゐけそ**いろゐき風**（千載）秋下、加茂成保「吹みたる柞ゲ原をみわたせはいろゐき風ももみぢーゐけり（新古今）哀傷、久我太政大臣「物おもへはいろゐき風もゐのりけり身ゐーむ秋の心ゐらひゐ（夫木）好忠「秋霧のたちつるそのら心あてゐいろゐき風のさ衣よーむ

いろ喪服をいふ今も京にて凶服ゐきなふ家をいろ屋といへるよー人いひき「**いろゝへぬ**（源幻）九女房ゐどもゐかの御かたみのいろゐへぬもゐり**いろの御ぞ**（榮曉まつむー）三院の西のたいの南西かけ

て齋院はおはしませいとゞうつくしげにていろの御ぞせぎ〳〵なるにいと黑き御ぞかさねて奉りて[いろになる](清輔集)美福門院うせ給ひて後さるべき人々みないろになれることと思ひて俊成卿のもとへつかはしける「人なみにあらぬ袂はかはらねど涙はいろになりにける哉[いろなる](顯輔集)いろなりし年三月盡の心を哥云々(續古)哀傷母の思ひに侍りけるにさきだちていろなる人のもとにつかはしける(同)同父卿の服ぬぎけるころ母又身まかりければよめる法印實伊「ぬぎせつるかひこそなけれ藤衣今もいろなる袖の涙に[いろ](榮つるの林)三くろつるばみの御こうちぎにけざやかなる御いろのほど(續千載)哀いろをばゆるしながら出家をばとゞめけれども(平家物語)三、小松殿熊野詣の所に大臣下向の時いもこ河をさゝられけるに嫡子權のせけ少將維盛以下のきんだち淨衣の下にうせいろのきぬをきて夏の事なれば何となう水にたはふれ給ふほどに淨衣のぬれてきぬにうつりさるがひとへにいろのごとくにみえけるを筑後守貞能これを見とがめて何とやらんあの淨衣の世にいまはしげに見えさせまし〳〵候いそぎ召かへらるべうもや候らんと申ければ云々[いろ]倚盧、喪の中こもり居る所をいふ(禮記)間傳父母之喪居倚盧寢苫枕塊(文德實錄)一、皇太子下殿御宜陽殿東庭倚廬(つれ〳〵草)廿八段諒闇の年ばかり哀れなる事はあらド倚廬の御所のさまなど板敷をさげ葦の御簾をかけ布のもかうあら〳〵しく御調度どもおろそかに皆人のさうぞく太刀平緒までことやうなるぞゆゝしき

補 [いろ]品といふ意(新古)秋上攝政太政大臣「おしなへておもひしことの數々になれいろまさる秋のゆふくれ(尾張家つと)色は品といふ事一首の意常は一つにしこめてれきしものれもひの數々に秋は又猶さら色品か增ると也

[いろ〳〵]俗におなド又さま〳〵の色をもいふ(源夕かほ)十二前栽のいろ〳〵みだれさるを過がてにやせらひ給へるさま(同みのり)四いつのそぞにいとかくいろ〳〵おぞしまうけけん[いろ〳〵の](竹とり)旅の空にたせけ給ふべき人なき所にいろ〳〵の病をして(古)秋上「みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける(源みをつくし)廿四夜ひと夜いろ〳〵の事をせさせ給ふ[いろ〳〵に](源うき舟)五十六猶さる物にておきさらん今はとて見ざらんもさいと戀しかるべしと人さろくいろ〳〵に。今本ナシ心の內におぞせ(狹)一、上、廿七「いろ〳〵にかさねてはきド人しれば思ひそめてしよはのさころも(夫木)十五能宣「下紅葉いろ〳〵になる鈴鹿山時雨はいさくふるにぞあるらし

補 [いろ〳〵]なくさま(宇治)十四僧都いろ〳〵とうちなきて

いろは　假名の文字也（壬生集）下「淡路しまや難波をうけて見さゝせゞ波のいろはのあーてありけり　補（玉勝間）卅七ノ六　台記ヨ久安六年正月十二日今暦參御前依勅書以呂波と有り此頃も童にいろはをかゝせー（今川了俊落書露顯）手書のいろはをゞいうべき學ふべきぞや

いろは　母（神代紀）上十（和名抄）二　母伊呂波○契沖云母よく子を養て見るべきいろはことよて万葉東歌に家々ゆゝといふをいらーむる故ゆゝいふ○真淵云いろゝ家のろねといふも舎兄舎弟の意ゆて同居同胞をいにーへゝ實の兄弟とすれゞ母も同居てその母ある意にて家母といふこと　いろと　弟又妹（神代紀）上十七　欲見其妹（イロト）　いろね　あるをそぶきていろはといへるなり　兄又　いろせ　兄をいふ中ゆ弟をもいふ○俚　いろは　以下これらの詞の中つ世ゆゝをさゝ用ゐず　こと（古事記）ヨ見ゆ

いろどる　彩顔ゆも（古）秋上「いとゝやもなきぬる鴈ゝ白露のいろどる木々ももみぢあへなくに（後撰）秋上　業平「秋萩をいろどる風ゝふきぬとも心ゝかきゝ草葉からねゞ

いろどり（源末つむ花）三十五　繪あどかきていろどり給ふ（同あげまき）四十九　額髪をひきかけつゝいろどりさる顔づくりをよくしーて打ふるまふめり（夫）廿三　爲家「うそくこくいろどりさる時雨哉ゑ島がうらの木々の梢を　いろをとる　（夫）四　定頼「もーゑ草かきあつめさるゑゝまにゝ花さく春ぞ色ゝとりける

いろをもきらいぎ　色種（イロクサ）のいろ也物ノエ（うつゑ俊ゝけ）いゝきものどもひと山にゑり嫌ヒナキをいふ

ちて目ヨ見ゆる鳥獣色をもきらいぎころしろーくへゞ云々

いろゝ　色香（古）春上　そせい「よそにのゑ哀れとぞ見ー梅の花あゝぬいろゝゝをりてありけり

いろげゑ　色紙（夫）十二三條入道左大臣「鴈ゞねのかきつらねゑる玉づさゝあさゑどりあるそらのいろげゑ

いろそふ　物事のかさあり（玉葉）雑四　都をそゑうゝきて後物申ける女のもとより前右近中將維盛もゝかくありヨける事を聞つゑへて哀れもいとゞいろそふさまにいひおこせて侍りけるかへりことに資盛哥云々

いろづくづき　万にいふ　鼻ヨ　（源末つむ）廿五　さきの方をこーたりていろづきゑる事云々（同ヨゝゐ）下百　御もなのいろづくまでゑをれ給ふ　梅に　（同末つむ）廿六　もーがくしのもとの紅梅いととくさく花ゐていろづきにけり（同幻）廿四「春までの命もーらぎ雪の内にいろづく梅をけふかざーてん　藤（同幻）八　ハもめるを　紅葉（同さゝき）廿九　もこちのやうゝ〳〵いろづきゑり　稲（夫）廿二　爲家「ゐがのうらをちの濱田のかりーそにいろづく見れゞ秋ゑちにけり

いろつや　今とお（枕草紙）十一　朝日花〳〵とさーあがるそどに云々　御こーのかゑび

らのいろつやなどさへぞいこゝろき

いろ糸　いろはの所ゟ附す　いろくづ　いろこ　ゟか

いろくさ　湖月の師説（源のゐき）初秋の花を植させ給へる事常の年よりも見所おゝく色くさをつくゝて色々種々也

いろふ　（孟津）取扱ふ心ゝ（尺素往來）國衙所務者任先規不可相倚（源松風）五惟光の朝臣例の忍ぶる道ゝいつとなくいろひつゝふまつる人あれば補（源若菜）下十あにでとゟも目のみまがひいろふ廣足按ゟ此まがひいろふハアレコレゟ目のうつりて一ッゟ見定められぬさま也前書に引る（松風）五惟光の朝臣例の云のふる道ゝいつとなくいろひつゝふまつる人なれバ」ハもゝら其事ともよかゝつらふをいへる也まがひいろふゝ一ッゟ目のかゝつらひ見定めがさき也まがひよりつづきさるゟて其意と聞も本書ゟ（孟津）取扱ふ心ゝ」といふと出せるゝ松風のゝさまゝかおへれど若菜おるゟかなゝむずこれを細流暁花ゟまがひ色めく也とあるゝゝさくおもひわやまられしおり

いろふー　晴ある事（うつゝ藤原の君）廿二道隆寺にかんつけのこゝの大いあるこざー給ふおるを云々かくて此寺にゝけふのいろふーにてけーからぬいとおそゝり（かけろふ日記）上儀式の車にてひきつゞけりー物の具きさるーもづゝへ契沖本てふりおどかくーゝいけゞいろふーに出さらんこゝちしてー今めゝらー（源みをつくし）廿二かくくちをーきゝものゝたに物思ひなげまてつゝふまつるをいろふーゟ思ひさるに（枕）五九、五節

いろこ　いろくづ（和名）十九鱗以呂久都、伊呂古魚甲也（うつゝ梅の花ゝさ）十一いろ〳〵のあげゞりをいろこのでとうちわさーて補（山家集）「見るもうきいろなもにはぐるいろくづをのゞらゝさでもー〳〵むもちあみ（同）「水ひさる池ゝうるゝふおゝさゝ涙ぞふる心ちをる

いろころも　正月元日のさうぞくをいふ（源ゟふひ）二五十「あまごとーけふあらさめ色衣きてかゝらの袖にーむらめ

補　いろことにある　色異ゟ也（殷富門院大輔集）「秋風にうらみわさりー葛の葉の猶あゝぜとやいろことにある（續古今）秋下順徳院「秋風にあびくあさちゝ霜ゝれていろことにある嶺のゟみち葉（續後拾）春上、在原棟梁「いろことにさける梅枝うへーこそをる人

いろでのこ　好色の人をいふ（竹とり）色好こゝとゝいへる、五人（いせ物）廿段五色好こゝある女（同）卅九段あめの下のいろでのこ源のいこゝるといふ人（源やとり木）十六なまめゝーうもづゝーゞにていこゝうけーきたつ色好こゝどもになぞらふべくもあらぜ（榮さま〳〵）

三あまりせき〳〵うなりて色このそにありにけるとあん

いろあいひ　いろわひにおおー　朝貌の花に（源やとりき）十九をり給へる花を扇に打おきて見る給へるぞやう〳〵あくみもて行くもなかー〳〵いろあいひをくーう見めれば顔に（濱松）三何のつくろひもなく打とけ給へる御朝ぎのけーやういとぞうーたらん色あいひにて

いろあひ　俗におおむね万にいふ　顔に（うつせ國もづり）十二御年五つばかりばかりにて大きに御色あひ御ぐしの筋母君ぞ似給ひつきど云々（源もみぢのが）初まちとりさる樂のおぎいーきに顔の色あひまさりて常よりも光ると見え給ふ（狭）三ー上くるーうてよりおさせ給へる御顔のいろあひけーきおど衣に（源とゝきゝ）十三きるべき物常よりも心とゞめさる色あひおざまいとあらまほーくて花に（枕）三、廿ぞんたうい云々いと花やくおる色あひよて

いろさま　顔のいろをいふ　（狭）三中廿九さばくりありぬ所おくらうさげにうつくーかりー御色さまをたに

いろめるさる　（いせ物語抄）禁色をもるさるゝ也禁色の宣旨といふ事あり女も色もるされさるゝ綾織物をきる也（いせ物）六十五むらーおそやけおぼーてつくう給ふ女の色めるされさるありけり（榮初花）卅二

れもゝ〳〵との、ーそつるおらさうそくどもを見れば色めるされさるも織物の裳からきぬおおどう白きおれば何ともえそ色めるされぬ人もそこーおとおびさるゝ三重いつへのうちきに無紋おど白うきさるもさる方に見えさり

いろめくめき　好色めく也　いろめいとる　めきの音便　（源末つむ）七あまり色めいさりとおぼーてつくめき　体の詞（榮さま〳〵）十六大納言殿ゝ例の御心の色めきゝむづくーき迄思ひ聞え給へれど宮の御前更に〳〵あるまじき事に制ー申させ給ひけるを

いろめくう　（源もみぢのが）八色めくーうおよび給へるを女にて見んゝをくーかりぬべく（榮月のえん）十七かの北方も御かさちも心もをくーうさへおゝしけれぐかゝる事ゝあるなるべーき心ちに打守られつゝ、補（金葉）秋藤原顯輔「おらつめや心おくらんをこおへーいろめく野べゝ人かおふとて

いろもおくなる　驚きおそれて色を失ふをいふ　（源玉のつら）二十ぬくりくによりきさるけゝひにおびえておとゝ色もおくなりぬ

いろせ　いろはの所よ附す

いむ　岩（和名）一盤大石也以波日本紀私記云千人所引磐石和名知比乃以之（古）二「たねー

あれば岩にも松はおひまけり戀をしこひばあはざらめやは

補 いもがいもなん いふならはいへよ也 (後撰)春中素性「山守はいもゞいもなん高さごのをのへのさくらをりてかざゝん(續後撰)春下藤原信實「吹風をいもゞいもなん櫻花ちりこふころの春の山守

いもゝし 岩橋(拾)雜賀春宮女藏人左近「岩橋のよるのちぎりもさえぬべしあくるさびしきかづらきの神(夫)廿一賴氏「くまゐけば木の下くらき岩橋のしたらし川に飛螢哉 くめのいもゝし(壬生)下「さりともといのりし中のたえしよりあふことゝさきくめの岩橋 井出のいもゝし(夫)廿一顯季「かよひこし井出の岩橋たどる迄所もさらぬさける山吹 やそのいはゝし(同)顯朝「雪降ば天の羽衣白たへに風さへさゝるやその岩橋

いもゐ(和名)一巖以八保(古)冬、あきみね「白雪の所もさらぬふりしけばいもゐにもさく花とこそしれ(同)雜下「いゝならんいもゐの中にもまばゝは世のうき事の聞えこざらん(源すま)十三もしもなれたらんいもゐのなゝおぞしやらる

いもと 岩戸(夫)九俊成「冬とぢしいはとあけても氷室守夏は通さぬ關路なりけり 天のいもと(竟宴哥)(新拾遺)神祇經覽「思ひゝねたばかりごとをせざりせばあまの岩戸はひらけざらまし(拾遺愚草)下「天の川あくる岩戸も情しれ秋の七日の年の一夜

を いもとの關(八雲御抄)空の事也(夫)廿一「雲井なき海山こえてゆく秋をえやはいもとの關もとゞむる(同)後鳥羽院「天つ空岩戸の關の明ゞたに風の吹しくさを鹿のこゑ(新拾)春上爲藤「あけさたるそらにしられて久方のいもとの關を春やこゆらん

いもとかしは 石をいふなりとぞ○宣長云石常磐(イハトコシハ)なりいもをしもといふは稻をしねといふはおなじといへり(万)七、十一「よしの川いもとがしはと常磐なれ我はかよはん万代までに(千五百番)「たきつ波たつゝときけはよしの川いもとかしはは時雨ふるなり(新勅)戀一賴氏「つれなさのためしはありと吉野川いもとかしもをあらふ白波(續古)冬爲氏「吉野川たきつ川風音さえていもとかしもに氷る白波(草庵集)「しよしのやいもとかしはもうつもれて川風さむしふきる白雪 補(新千載)冬、順德院「よしの川いもとかしもの初しくれときはのいろはけさもつきなし(新後拾)雜春賴英「よしの川いもとかしはもいろゝへて花ちりかゝる岸の山吹(同)賀定家「よしの川いもとかしもをこはなしのときもかきもぞさゞ君の御代(万代)よしの川いもとかしものいはでのみおもふこゝろの色ぞかもらぬ

補 いもとこ 岩床(万)一長歌「いもとこと川の氷こゝり

補 いもちとり 岩千鳥(兼輔集)「いもちどりあやなゝるねは何ゆゑになゝれのもまのなゝぎにあるらん(同)「物思ふをなくさのもまのいもちとりなぐさむまにぞな

きまさりける

いもる 所レ言也 いもるゝ いもれて の類 いふ の所ゝ出す

いもりど 岩角の心也 (拾遺) 秋高遠 「あふ坂の關の岩りどふミならし山立出るきり原の駒

(續拾) 戀五紫式部 「りへりてハ思ひしらぬや岩りどにうきてよりける岸のあだ波 補 (隆

信集) 「ひく駒やちりくなるらんあふ坂の關のいもかど音ひゞくなり

いもりど 岩門 (源夕きり) 六十一 「うらミさびむねあきがたき冬の夜に又さしまさる

關の岩りど (袋草紙) 爲仲 「東路のことつてやせし郭公關の岩りど今ぞもぐなる 天

のいもりど (堀川百首) 神樂顯仲 「むらにぎてたくさの枝ゝとりりさりねイうたへバあ

くるあまの岩りど 補 (拾玉) 「むのゝめや關のいもりど霧とぢて鳥の聲にも猶あけ

ぬりな

いもがね 岩の根なり (万) 七、卅二 「岩がねのこゝしき山にいりそめて山なつりしミ出りて

ぬりも (夫) 十三、後九條左大臣 「秋草の瀧をうけたる岩がねにこぞれてかゝる月を見る哉

いもがくれ 岩のりげをいふ (源ゑり紫) 廿一 いもがくれの苔の上になミゐてかハらけまゐる

(万) 二、卅四 「神さぶといもがくれまも○是ハ皇子を薨り奉りし所をさして申せり

いもりげ 岩陰 (山家集) 上 「つゝドさく山の岩りげゆふもえてをぐらハよその名の

ミなりけり (榮石蔭) 十二 辨資業 云々 「岩りげのはふりを霧にさきりねてその夕くれ

の心ちせし哉○是ハ葬所ノ地名也 補 (續後拾) 戀一顯輔 「むるらめやいもりげに生る白菅のねふ

りくおもふ心ありとハ

いもがき 岩のおのづから垣のやうに立めぐれるをいふ (源あげまき) 六十二 「見し人もなき山里のいハ垣

に心ながくももへるくぜ哉 沼のいもりき (新古) 戀一高遠 「みこもりの沼の岩垣つゝめ

どもいりなるひまにぬるゝ袂ぞ (堀川) 師頼 (五月雨に沼の岩垣水こえてまこもか

るべきかさもおぞえぜ (千) 夏、攝政前右大臣 「五月雨にぬれ〳〵ひりんあやめ草沼のいハ

がき浪もこそこせ いもがきもミち (古) 秋下關雄 「奥山の岩垣もみぢちりぬべしてる日

の光りミる時なくて 補 (續古) 戀五、小宰相 「いりでまさありでやミにし奥山のいもがき

しミづかけてだに見ん (万代) 土御門院 「あやめ草沼のいもがきかきくもりさもさみさ

るゝきのふけふりな (新續古) 雜中公名 「さびしさをしのびぞかぬる奥山の岩がきしミ

づなれてもめども

補 いもさゝミ 岩疊 (万) 七ノ廿二 「いもたゝミかしこき山としりつゝもされハこふるり

なぞらへなくに (風雅) 旅道全法師 「いもたゝミのぞりさづらふ峰つゞき雲にもつれ

て見ゆるかけもし

補 いもこおひ 婦人着帶也 齋肌の義 (吳竹集)いの部 (倭訓栞)由の部 (擁書漫筆)四ノ十三丁などに見えたる說を考合すへし

補 いもこき 岩瀧 (万代)「おく山れ谷のいもたき身をさらぎこれてくだけてこふとしらなん

いもれ 俗にいふいれ因縁のいもれに同し (山家)下「花見れバそのいれとハなけれども心のうちぞくるしかりける いもれなき (著聞集)一、廿三 汝が恨所そのいれなきにあらねども先世のむくいをしるべきなり (同)三、十三 近代節會などにも上達部物をくハぬ事いれなき事なり古きにまゝもべき由沙汰ありけるに 云々

いもれぬこと 事ゝ又ハ言ゝいれなき心なり後の世にハいれざるをこのふるまひなどいへり (竹とり)國王のおそせでとをまさに世にもこ給ハん人のうけこまハり給ハでありなんやいもれぬことなし給ひそ

いもれたり イフ所モツトモヂヤ さもいもれこり (竹とり)猶これをやきてこゝろこんといふ翁そもさもいもれこりといひて大臣にかくなん申はといふ 尤いれこり (著聞)二、卅 件の承仕荅ていハくもとより堀もドめてし水を堀とゞめさせ給ひて制止給ふべきやう候ハぞ又かの僧の言申所尤いれたり水の末をバ流ざんぞるぞとて

補 いもつぞ 岩壺 (新六帖)衣笠内大臣「いもつぞにたゝふばゝりの山の井のつゝゝなくても世をもゝがもや 瀧の岩壺ハたの部に出

いもづたひ 岩傳ひ (夫)廿光行「岩づこひ駒打ここも谷川の音もたゝしれ山に來にけり

いもね 岩根 (千)賀俊頼「神代よりひさしかれとやうできなき岩ねに松のたねをまきけん いもねふこ (万)十一、七 (いせ物)七十四段「岩根ふこかさなる山ハあらねどもあハぬ日あまこ戀こゝるあもおほくゝな(いせ) 岸のいもね (後拾)春下實季「水底に紫ふゝくこゆる哉きしの岩根にかゝる藤浪 いもね松 (同)雜四御製「万代の秋をもしらですぎきたる葉ゝへぬ谷の岩根松哉 いもねの松 (堀川)苔肥後「れく山のいもねの松のゝげにてや苔のみどりもときハなるらん

補 いもねのまくら 岩根枕 (新後撰)戀三光俊「しのふ山いもねのまくらかもそともしこ行水のもらさじもゝな

補 いもねもげ 岩根菅 (万代)「よそながらこむろの山れいもねすげいハねバいとゞくるしゝりけり

いもなこ 岩波 (續拾)夏定家 (夏もつる御そぎもちゝき川風にいも波たゝくかゝるしらゆふ

いもんかさおし　イハウヤウモナイ殊の外ある心（天徳歌合記）左まさるまゝにくよてりの朝臣いん方なしと思へり（源ときゝ）卅つまゝ下きをーていんんらさあーと式部をあゝめにくゝて（同タゝは）廿九息ゝとくたえはてにけりいゝんんらさあーなく（同ときゝ）十二いゝんんらさおくをできことのもあれなる歌をよゝおき

いゝんや　況今とおもひ（うつゝたゝこそ）人の上にたよいふ事あゝりーて人ありいゝんや更に親の上よいゝひてんや（同國もつり）中一、おやせでとおくとも昔の事を更よゝすれ侍らばいゝんやさらにかく仰せらるれば（竹とり）たゞし此玉たゝやをくえとられ下をいゝんやたつの首の玉ゝいゝんやとらん（いせ物）百七段ゝらけきば文もをさ〳〵ーゝらばゞ詞もいひーらぎいゝんや歌ゝよまざりければ（加茂保憲女集）ゝが身のでとゝおーき人ゝおゝりけり云々鳥虫におとり木にゝ及ぶべゝらぎ草にたよひとーゝらぎいもんや人にゝおらゝぎ

いもる　岩井、岩間よりもき出るをいふ（拾）夏河原の院の泉のもとにそゞと侍りて（惠慶朗詠）「松ゝげの岩井の水をむそびあげて夏なれ年と思ひける哉（源さゝき）十五「年くれて岩井の水も氷とぢ見ーし人影のあせもゆく哉（好忠集）十一月上（夫）廿六「風さむくなりにーし日より相坂の山の岩井にこくさゐてけり（夫）闕の

いものと　岩戸におおーし（月清集）下「そそぎて、人ゝあとなり

補　いものかけこち　同かけぢ（古今）雑下「世にふれば憂さこそまされみよしけ、いものゝけみちふこおらしてん（千載）春上、待賢門院堀川「雪ふゝきいものゝ、里も春ゝ來にけを（新千）秋上、二品法親王覺助「こすれぎよふこおらしてしみよしのゝいもれのけぢの秋の夕くれ（續千）雑中宣時「山ふゝこ人のめき、やたえぬらん苔にあとおき岩のかけみち（新續古）雑中公泰「尋ね來て又ふこおらに跡もおしこがすむ山のいもれかけみち（同）同義重「山里ゝつま木こるそのおのれのみ通ひおれたるいもれかけこち

補　いものたゝ水　水岩下（玉葉）夏、入道前太政大臣「秋近き谷の松風音立て夕山涼し岩のしゝ水

補　いもおろを　岩下す（定頼集）「いもおろにゝるあまれつり舟

いゝく　曰（古）冬「梅の花云々左注此歌ゝある人のいゝく柿の本の人丸ゞ歌あり（土佐）舟君のいゝく（同）梶とりふおこどもにいゝく（竹とり）かくや姫翁にいゝく（同）翁詞云々かくや姫のいゝく（同）云々といへばかくやひめいもく（同）云々といふ翁いゝ

く(同)もしり入りていへく(同)文をミるにいもく 文詞云々(同)大臣答ていへく(同)竹とりの翁に告げていへく(同)かくや姫なく〳〵いもく

いもくら 磐座(永久百首)さゝき兼昌「いこま山手向へこれゝ木のもとにいもくらうちて榊さてけり

いもや(和名)十窟 伊波夜 土屋也一云掘地爲之 天のいもや(古事記)上廿 於天之石屋(イハヤ)戸伏汙氣 いもや(月清)上「うき世ゝなひとりいへやの奥にもむ苔の袂も猶しぞるなり ミネのいもや(万)三、廿九「もさもゝきくめのさくこゞいましけるミネのいへやへ見れどあゝぬゝも あゝしのいもや(源わゝな)上八十九かのあゝしのいへやより忍びて侍りし御いのりれ卷數 蜑のいもや(同あゝし)十四もまへいと心ぞそくてあまのいへやもまれなりしを 濱のいもや(四條大納言集)「あまのもむもまのいへやの佛よへ浪の花をやをりてよもらん 神のいもや(夫)卅大堂神童子いへやまて 前權僧正宗懷「雪間より立出て見れば霞けり神のいへやの春れあけぞの 山のいもや(源もーひめ)卅二さま〳〵の御とふらひの山のいへやにあまりし事などの給へるに 苔のいもや(拾遺愚草)「よしさらばともなひもてよ秋の月苔のいへやに世へそむくとも 峰のいもや(夫木)卅、衣笠内大臣「あへれなりミねのいへやの冬でもりのぞるけふりのさゝぬばゝりぞ○ いもやの洞 いもやの床 えぞがいもや よしの山奥のいもや なと(夫木)に見ゆ

補(新拾)秋下道濟「されもミてあへれしるらんとれへ山おくのいもやの有明月(月清)一「山ぶしのいもやの洞にとしふりて苔にかさぬる墨染の袖

いもま 岩間(いせ物)七十五段「岩間よりおふるミるめしつれなくへしネひしネミちかひもありなん

いへまネ〳〵 いへまー のさぐひ次の いふ の所に出す

いもまくら 岩枕(夫)廿六家隆「あづまぢやしるもの礒の岩枕しげくもとひてゝへる波哉(同)廿五光行「沖つ瀉礒ねに近き岩枕かけぬ浪にも袖へぬれけり 左注此歌路次記云此關遠からぬネどに沖津といふ所あり海に向ひさる家にやどりて留りされば也ふべによる浪の音身の上にかゝるやうに覺えてと云々 補(千載)秋上俊頼「たなばさのあまれかもらのいもまくらかへしももてぞあけぬ此よへ(新拾)羇旅定家「ふしなれぬ濱松が根のいもまくら袖うちぬらしゝへるうらなミ

補 いもけなき イトケナキ也(源若紫)「いもけなきさつの一聲きゝしよりあしまになつむ舟ぞえならぬ(うつほ樓の上)五十二いと此おとなどもいもけなしやとていで給ひぬ(落くネ)十いもけなきものゝらをゝしければ アコギカワビシガル チイトケナキト云也 いもけ(源夕霧)卅四なネいといもけてつよき御心おきてのなゝりけることゝ(同螢)廿三まざいもけさ

るひゝなあそびなどのけもひの見ゆきば（同紅葉賀）心なげにいもけて聞ゆるゝなどさふらふ人ども聞えあへり（榮かゝやく藤つぼ）をさなうるべきほどにいさゝらいもけさる事なく

いゝふ（二様あり祝する事又神を祭る事にいふ）（神代紀）下十六齋主（此云伊幡毗）いもふ（後撰）賀貫之「いゝふ事ありとなるべしけふなれど年のこなさに春も來にけり いゝひ（古）序 又鶴龜につけて君を思ひ人をもいゝひ（同）賀そせい「万代をまつにぞ君をいゝひつる千とせのうげにもまんと思へば（枕）一二正月一日ゝ云々世にあるとある人ゝもがさかさち心ことにつくろひ君をもさが身をもいゝひなどしさるさまことにをうし（源あふひ）十二髪そぎの所よそぎゝて、ちひろといもひ聞え給ふを（同松風）十六あら礒うげに心ぐるしう思ひ聞えさせ侍りし二葉の松も今ゝたのもしき御おひさきといもひ聞えさせるを（いせ物）百十七段「むつましと君ゝしら波ミづがきのひさしき世よりいゝひそめてき（後拾）神祇長能「白妙のとよミてくらをとりもちていゝひそゝむる紫の野に（同）同石清水よ參りて侍りける女の杉の木れもとに住吉の社をいゝひて侍りければ云々

いもひ（体の語）（源もつね）初齒固のいもひして（散木）中四撫子にいゝひの心をよせてよめる いもひ事（源もつね）初年の内のいゝひでとどもしてそれあへるに（同）三いとしさゝうなるミづうらのいゝひでとゞも哉（孟津）いうめしき祝言と也（孟）よよらば祝言なるべし いゝひの事（同あげまき）四十四三日よあさる夜ゝ云々さるべきいゝひの事にこそゝとおぼして

いもひ歌（古）序 六つよゝいゝひ歌 いゝひの和哥（榮さまゞ）十九此舞人の中に六位あるに云々 源兼澄舞人にてかゝらけとりたるゝ攝政殿御覽ゞてまづいもひの和歌ひとつゝうまつるべしと仰らるゝまゝに いもひの杖（枕）四廿六卯槌の頭つゝミたるちひさき紙に「山とよむ斧のひゞきをさつぬきばいゝひの杖の音にぞありける（夫）卅二「つきもせぬいゝひの杖ゝ龜山の尾上にゆきてきるよぞありける（同）同肥後「さが君をいゝひこめつゝ竹の杖千とせ限るぞうれしうりける 補（後撰）賀「百とせといゝふをされゝ聞ながらおもふがさめゝあうにそありける（万）十二、十五「こまゝしき紐のむすびもとをさけぜいもひてまてどしるしなきうも（是ハ齋ひつゝしむ意也）

いもひおき（拾愚）上「いもひおきてなゝ長月とちぎるうなけふつむ菊の末のしらつゆ（伊物）眞名本八十六「世の中にさらぬさうれのなくもうな千代もと齋（イハ）ふ人の子のさめ（古今ゝなゝく）今本ゝいのる

いもふ藻（伊物）「わさつミのかざしにさはといもふ藻も君がさめにゝをしまざりけり

いもひ子（万）九廿四「ゝしきあやの中よつゝめる齋兒（イハヒコ）も云々（月詣）「いゝひつゝ立ぞうへつる夏衣あうぬなでりのなみざうゝれと

いもふち　岩淵（万）十一、卅四（六帖）三、淵「神なひの打廻（マフ）さきの岩ふちにかくれてのミやこ
ゞ戀をらん

補　いもこすげ　岩小菅（万）十一「三諸の山れいもこすげ云々（新後撰）冬、順徳院「しれしまや
御室の山の岩これげそれとも見えぞ霜さゆる頃（續後拾）戀一頓阿「數ならぬミむろの
山のいもこもげいれねばあさよなれみざれつゝ

いもき　岩木（万）四、四十九「かくぞゝり戀つゝあらぞれ石木にもならまし物を物思もぞ
して（いせ物）九十六段いも木にしあらねば心ぐるしとや思ひけんやう〳〵哀れと思ひ
けり（うつれ樓の上）七十いミドき岩木鬼の心なりとも聞てれ涙おとさゞらんや（源
タぎり）七十岩木よりげになびきゞたきれ（同ゐづまや）三十あれれなる御心ざまを岩木
ならねばおもれしある（濱松）四いミドうもてない給ふさまをいゝぞゝりの岩木ゝ
れ見しらざらん（千載）戀二政平「あふことのかくゝさければつきもなれ人の心や岩木
なるらん（夫）十五光俊「岩木にも物の心れありといへばさぞなさゝれの秋れかなしき

いもきりとれも　岩をきり通してゆくごとく流きのもるどきをいふなりとぞ（古）戀「吉野川岩きり通しゆく水の
音にれさてド戀れしぬとも（壬生）中「もみちだゝさそひもとめぞ立田川岩れり通
も水のもやさに岩きる波（夫）廿四有仲「小忌衣ミもそそ川の早き瀬に岩きる浪もたえ
ぬ御代哉補（拾遺員外）「瀬をもやミ岩きる波のよとゝもに玉ちるぞゝりくざけて
ぞふる

いもきりおつる　（新後撰）冬實伊「よしの川いもきりおつる瀧つせのいつのよ
どミにこれりそむらん

補　いもぎし　岩岸（續古）春下爲家「もや瀬川なミのかけこれいもぎしにこれてさける
山ぶきの花

いばゆ　（和名）十一嘶以波由俗云以奈々久馬鳴也（堀川）河内「冬枯になづミし駒も春くればいも
ゆもかりになりにける哉（夫）三行家「もえわさるこやれあしべになさりてやつの國
がひれ駒いばゆらん

いばゆる　（後拾）春上靜圓「あれづのゝもぐろの薄つのぐめば冬さ
ちなづむ駒ぞいばゆる（源ゐげまき）十四御とものの人々おきてあわづくり馬どものい
ばゆるをも

いばえ　（同もま）四十七風にあたりてれいもえぬべければなんと申給ふ（
堀川）隆源「うべしこそなづミし駒をいはえけりつのくみにけり萩のやけ原補（万
代）後徳大寺「あざちの、野ぎはのまれけもえにけりいばゆる駒のけしきあるしも（同）
惠慶法師「よどのなるミつの御牧ゐもなちかふ駒いばえたり春かきぬらし（同）小從侍「い
ばえつゝ野澤にある、春駒れなへてあしげど見ゆるなまけり（拾愚）上「をちかさ
や花にいばえて行駒のこゑも春なるなかぎ日ぐらし

いばへ　（濱松）一上御供の人の

中にいはへたるものありていさゝか心ときめくうつせてはるかゝきいでたる關の人々おどろきて其戸をあく　廣足云此いとへいいゝある意あらたいとえど書へー猶考ふべき也

いはゆる　世ニ(イフ)（古事）上、十　其所謂黄泉比良坂者云々（うつゝ藤原の君）うさてもの給ふ哉いはゆるあて宮ぞかし（同吹上）下、廿五　れゝやけでもいとなぐさむ方もなきよ見給へ煩ひていはゆる田舎人よなんなりまて侍る（同）四十三、吹上の事を　守詞　いはゆる西方淨土に生れたるやうにあん（源紅葉）九　あれ光る源氏のいゝゆる御さうりの大將あどよおもせーころ云々

いもを　岩本（新後拾）夏　御製「こよしやいもをとーらあこ(夫)九　師光「山川の岩本とよむ蟬の聲楢もやがてひぐきあひさり

補　**いもをとすけ**　岩本（續千）戀、一、法　印頼舜「おもひ川いもをとすけをこゆみのねよあらいれてぬる、袖ろあ　**いゝもとこそけ**（新千）戀、一衣笠　内大臣「こひこびぬあふよもかさしおく山のいもをとこそけ苔のこあらいれて

いもをみづ　岩漏水（源こてふ）十　二「思ふとも君いゝあらじあこきりへりいもをみづ色と見えねば（壬生）上「月いさえ岩もる水い秋の聲夏のよそある廬のうさゝいもす　**いもせて**　人よいいむる也　**いもを**　**いもを**　**いもを**　**いもを**　**いもを**　不言○こゝもとのさぐひ次の　**いふ**　の所よ附そ

いもを　さーおいて論ぜざる心也（源ゑ合）廿もんさあーよの心也（貫之集）「あら玉の年よりさきに吹風い春ともいゝを氷ときけり（源わつまや）四なそ〳〵ーきあさりともいゝぜいきそひにひらされてよきわら人どもつどひさうぞくゐりさまい　**といもを**（同夕貌）一冊　よなら曉といゝを御心にーたがへるもの、

補　**いもすゝき**　岩藻（壬）二「よーの川一もとさてるいもを、きつりをる人の袖ろとぞ見る

いよしへ　古（古）序いにーへの代々のこらど（同）いにーへをあふぎて今をこひざらめらも（いせ物）卅二段　「いにーへの人（同きりつぼ）三　母北方げな（源やとり木）三　いにーへへがさり（同よこふえ）十一　そこいらとなきなんいにしへの人のよーあるにて　**いにしへ**　古と今也（同夏ろあ）上、廿六　いにしへへ今の御物がさり　**いにしへもくさき**　こーろさ（いせ物）卅二段　いにーへもくさきの

事どもなどいひて【補】(後拾)雜一範永「いにしへをこふる袖ざめやまさるらんきゝもならもぬみねのあらしに(續古今)戀五小侍從「たのめつゝこぬよをまちしいにしへをしのぶべしとはおもひやいせし(續拾)雜下兼氏「老ぬれバしのぶべしともしらさりしさがいにしへぞさらにこひしき(同)同俊成「いにしへの雲ゐの月いそれながらやどりし水のかけぞかもれる(續後拾)雜下宣時「おもひ出のあるにいあらぬいにしへのとゆざかれバやこひしかるらん(同)同秀賢「いにしへいおなし月日なへざてにて心にかよふ世々のおもかげ(源行幸)十七「いにしへいげにおもなれてあやしくたい〳〵しをまでなれさふらひ(同椎本)廿八としごろうちさそれさりつるいにしへの御こととをさへとりかさねて

いにしとし 過し年也(白氏文集)十七ノイニシ 去秋(拾)戀五、安倍廣庭「いにし年ねこドてうゑしさか宿の若木の梅い花さきにけり(源そま)四十四いにし年京をさかれし時 いにけりの類 いぬの所に出せ

いゆ(和名)十庵室庵ハ草庵伊保草舍也(續後撰)春中菅家「けさ櫻ことに見えつる一枝いいゆの垣根の花にぞありける(月清)下「初瀨山花にうゆ世やのこるらん庵あいれなる春の木のもと(夫)卅爲家「行くれて宿かる庵の杉柱一夜のふしも忘れやいせん(同)卅二爲相「山人の禁をかけてせむ庵いからぬ眞柴をまがきにぞゆふ 柴いゆ(同)卅季經「秋風になびく稻葉のさえ間よりゆのかに見ゆる賤か柴庵○松のいゆ 尾花のいゆなど(夫木)に見也 下いゆ(千首)耕雲「山のもに夕日のかげいのこれどもまづくれそむる松れ下庵

いゆ(和名)十廬○農人作廬以便田事伊保(山家)上「小萩さく山田のくろの虫の袖にいゆもる人や袖ぬらせらん 田いゆ(夫)卅、田家月、後法性寺入道「まぢらなる田庵にせこがいをやせこ月にもらしていく夜あかしつ

【補】いゆもさ 五百機(万)「たなぢさのいゆもさたてゝおるぬのゝ秋さりでろもされかとりきん(新千)四、秋上後伏見院「たなぢさのいゆもさ衣まれにきてかさねもあへぬつまやうらみん

いゆり いゆにおなじ庵廬ともにいゆりといへり いゆりつくる(万)十六卅「おしてるやなにもの小江にいゆりつくり いゆりむせぶ(夫)卅、小侍從「よそにてやかせむと見ましよしの山峰にいゆりをむせバざりせバ いゆりさせ(同)知家「しの原やさても心いとまらねどみくさかりふきさにいゆり哉 いゆり(源松風)七年頃ざにおなじいゆりにもせまぜかけもなられつれい 賤のいゆり(狹)四下、廿五ひさしく御覽せざりつる賤のいゆりども

もしは又さまさゝに立より給ひしいもがせこゝの槇の戸ども【いやり】（いせ物）四十三段「いやりおやきしでの田をさは猶さのむさがせむ里に聲したえぞは（夫）十二寫蓮「山田もるせこがいやりのうさゝねに稻づまわさる秋の夕くれ【草のいやり】【柴のいやり】【く】【む】の部【補】（曾丹集）「山ざとの梅のこもらに春もゝりいやりてをらん花も見かてら（万代）いやりつくるとてよめる 惠秀法師「まがきはるひざのたくみが 云々（詞花）冬西膽「いやりさはならの木ゝげにもる月のくもると見れば志ぐれふるなり（拾玉）一（いほりさすかた山きしのミゝづくもいゝゞきゝなすみねの松風（同）二「いやりさは野べふく風にむらぎえて尾上のゝねの聲ぞものうき（同）三「いやりさす野路も山路も月さえてをりよき旅の草まくらかな（同）五「いほりさす野澤の夏の夕すゞみもの所せき秋にぞありける（同）いほりさす野べの旅ねのかなしきはをぎに夕風萩に朝露（千載）雜上長眞 ますげおふる山した水にやどる夜は月さへ草のいやりとぞさは（續古）旅信實「まだしらぬ野原の末の夕つく日しばしなくれそいやりさすまで（新拾）旅、六條入道前太政大臣「いほりさすはやまの原のかりねにはまくらになるゝさをしかの聲（山家）「いほりさす草のまくらにともなひてさゝの露にもやどる月かな（新千）秋下桓豪「いほりさす山田のをしねかりしほに稻葉いろづく秋のむらさめ（玉葉）雜上實泰「いほりさす外面の小田に風過てひゝぬなるこの音ぞ聞ゆる（新千）雜下、垣雲法親王「足引の山田にさせるさゝのいや夜を重ぬれば ふしなきにけり（新後拾）秋上家隆「かりにさす庵までこそなびきけれ野風にたへぬをのゝしの原

【いほり】（和名）十營 伊保利 軍營也 用語にもいへり上に出せ【谷のいやり】【野べのいやり】【さゝのいやり】【杉のいやり】 などたのさすの部に出せ

【補】【いやえさは】五百枝サス也サスハサシ出シゲリ合フ意（万代）「木枯も時雨もしらぬいほえさは神なひ山のときも木のかげ

【いやしろをざ】五百代小田（拾芥抄）中、七十一方六尺爲二一歩云々積二七十二歩一爲二十代一。是にていやしろのひろきをおしはゝるべし（万）八、四十五「五百代小田を苅みだり田ぶせにをれは都しおもやも（堀川）苗代仲實「谷水をせくこゝな口にいぐしさていやしろ小田に種まきてけり。今の十町ばかりにあさるゝ

【いやドり】かまきりをいふ（新猿樂記）九蟷螂（イボジリ）舞之頸筋（クビ）【いやん】（和名）十九蟷螂 以保無之利【いやうドり】（散木）下、五十三ひきゝへの牛のことの外にちひさくやせてえひゝざりしゝばいほうドりとつけて笑ふやどにかさはしざまにたふれぬべくよろやへばうしろざまにあゆませてたふすなと人々あるを聞て「くびやそくいやうドりして立直れ

いへ 家（古）春上 家にありける梅の花のちりけるをよめる（後拾）秋上 家の萩を人のこひ侍りければよめる（詞）秋 家に歌合し侍りけるによめる（源玉かつら）廿九 右近が家は六條院近きにさりなりければ不ど遠からで（同うき舟）卅八 はかなうつくりさる家なりけり 御家（竹とり）翁詞 こが御家へもより給はぎしておはしましたり

いへ〳〵 家々（源夕顔）十八 隣の家々あやしき賤の男の聲々（同ほかな）上、七十七 つぎ〳〵のみこさち大臣の家々其頃のいとなえにて

いへ〳〵 良家の家々也（枕）十ノ十二 女房どもを御覽ぜにさして 關白詞云々 ひとりころき人なしやこれ家々の娘ぞかし 云々 よくかへりえてこそさふらはせ給はめ いへ いへば いへり のさぐひ いふ の所は出す

いへもよのつね イヘバ一トホリコレハコトノホカ也との心也（枕）七、十九臨時祭の所に かいなりのおさがさねなどみされあひてこなさかなさにこさりなどしさるいで更にいへばよのつねなり いふもよのつね（同）二、十 こと笛二つして高砂ををりかへしふかせ給へば猶いえどうめでさしといふもよのつねなり

いへはおろか 前に同（かけろふ日記）中上 をべていへばおろかにいえど（うつゝ藏開）下四十三 思ふといへばおろかなりあはせし夜よりかいつきてあはれにいえどき契りをを（源明石）七 いと心ぞそしといへばおろかなり いふもおろか（枕）二、十 七月ばかり云々月の頃は弥おきて見出をもいとおかしやえも又おかし有明もさいふもおろかなり

いへばえに いへは不得の心にてえいはれずといふことなりとぞ（六帖）「いへばえにいもねばくるし世の中を歎きてのえもつくをべき哉（いせ物）卅四段 「いへばえにいもねば胸はさこかれて心ひとつになげく頃哉（源をま）七 中納言の君いへばえにかなしう思へるさまを人しれぞあはれとおぞは（新勅）戀五 「いへばえにふかくかなしき笛竹の夜聲はされととふ人もかな 補（新千）戀三隆教 「いへばえにこがる、胸のあもでのえ思ひくらせるけふの細布（拾愚）中 「いへばえにおさふる袖も朽もてぬ玉の緒琴の秋のしらべに

いへばさらなり イフモ事アタラシキ也（かげろふ日記）上 「身の秋を思ひみだる、花の上に露の心はいへば更なり（源うすくも）七 つらつきまみのかをれるやどなどいへば更なり（同そゝむし）三 軸へうし箱のさまなどいへばさらなりかし（同ほかな）上、卅九 わさり給ふぎしきいへば更なり（同）下、十六 目もあやにかざりさるさうぞくありさまいへは更なり

いへとうど 妻をいふ（いせ物）四十四段 うとき人にしあらざりければいへとうどに盃さゝせて女のさうぞくかづけんとは（同）六十段 昔男ありけり宮づかへいそがしく心をまめ

ならざりけるやどのいへとうドまめに思へんといふ人につきて人の國へいにけり（うつや祭の使）廿七 さらき時にたくへへさらひ心ある人につきていへとうドつき家の内になれ物なくしてある人なんめくさきたのもしき（源さゝきゝ）十 耳もさこがちにびさうなきいへとうドのひとへに打とけさるうしろこゝがりをして（保憲女集）かしこき玉のうてなのいへとうドともなりて

いへぢ 家路（万）五、廿一「まつらなる玉島川にあめつるとたゝせるこらが家ぢしらぢも（源さゝきゝ）廿 これらをまゝりあがるゝ所にて思ひめぐらせば猶家路と思へん方へ又なゝりけり（同へしひめ）廿八「朝ぞらけ家路も見えぢ尋ねこし槇のを山へ霧こめてけり（後拾）夏（好忠集）「きて見よと妹が家路へ告やらんこれひとりぬる床夏の花 補（新古）哀傷、後徳大寺左大臣「花見てへいとゞ家路ぞいそがれぬまつらんとおもふ人しなければ（兼盛集）鷹狩したるところ「つまこふるきゞその聲もたえなくにもゝなくけふへ家ぢくらしつ

いへをいづる 出家をいふ（源ゑのり）三 ひとさび家をいで給ひなばかりにも此世をかへり見んとへおぞしおきてぢ（續古）雜下顯家「さても又いづくをつひのをゝりとて家を出んと思ひさつらん（續拾）雜中信實「いつへりのなゝらん世をぞそむくべき家を出るもまことならねへ（續千）旅蓮生「今更にこゝると何ゝ思ふらん我こそさきに家へ出しゝ

補 いへかぜ 家風（万）廿、廿三「いへ風へ日に日にふけとこぎも子がいへでともちてくる人もなし

補 いへかまど 家竈（源玉かつら）廿六 あさらしくかなしうて家かまどをもそてをとこをんなのさのむべき子どもにも引こゝれてなん

いへよりやゝ 家の内の物ならぬをいふ（源をとめ）八 家よりやゝにもとめさるさうぞくとものの打合しかさくなしきを

いへさゝし 高家貴人をいふ（源ゑもき）十二 家たゝう人のおぞえかろゝらで

いへづと 家土産（古）春上そせい「見てのゑや人にかさらんさくら花手ことにをりて家づとにせん 補（万）三、廿五 家裏爲（イヘツトニセム）

いへづゝさ 家事を司る人をいふ（源こゝな）上、十六女三宮の勅別當をのぞむ事をいへる所に 大納言の朝臣の家づゝさのぞむなる

補 いへづく 家近づく也（万）十五「こぎも子をもきてもや見むあもぢしまくもゐに見えぬいへつくらしも

いへづくり　家作ヤヅクリ（源よもぎふ）四　此頃受領どもの面白き家づくり好むが云々（夫）

廿七行家「うらやまし軒端にかくるさゝがにのさもことやせき家づくり哉○いへらく

いひけらく　の約也

いへうつり　轉宅也（かけろふ日記）中上、二　家うつりとゝせらるゝ事ありてこれはそこしもなれこゝる所にこゝりぬれば（貫之）三月つごもりの日家うつりするに「こが宿を春のともにしこゝるれは花はしこひてうつろひにけり

いへゐ　家居（遊仙窟）十七　別宅於此（イヘヰシテニ）（源そゝきゝ）十六　目に近き人の家居ありさま（同そま）廿三　行平の中納言のもしそこれつゝこびける家ゐちゝきわこりなりけり（同匂宮）四　いけるゝぎりの世に心をとゞめてつくりしめこる人の家ゐのなごりなく打そてられて（古）春上「のへちゝく家ゐしそれは鶯のなくなる聲は朝な〳〵きく（山家）上「こが物と秋の梢を思ふ哉小倉の里に家ゐせしより（夫）卅一　見つる哉

いへのぬし　家のあるじなり（枕）十六　遠き所人の國などより家のぬしのゝぞりこる

いへぬし　（宇治拾）五、十一　家ぬしゑこて

いへのゝぜ　家風俗にイツカチタテルといへるも此心也（拾）雜上菅原大臣母「久方の月の桂もそるぞゝり家の風をもふゝせてしゝな（源こゝな）上、百四　家の風のさしも吹つこへ侍らんに（後拾）

雜四　後三條院の御時云々　こきて歌よめと仰でと侍りければ越前「いにしへの家の風こそうれしけれかゝることのもちりくと思へば（金葉）雜上顯輔「家の風ふゝぬ物ゆゑもづゝしの森のことのもちらしもてぬる補（新後撰）雜上俊定「家の風ゝもらずともにつこへ來てむゝしの跡にそふたちもな（讃岐集）詞書云々「花の香の身にしむぞゝりにそふゝないゝなる家の風にゝあるらん　かへし「春のうちにそひぞゝりの花の香をいゝなる家の風とゝは見る（山家）「家の風つこふぞゝりはなけれどもなどゝちらさぬなげれことの葉（同）「家の風むねと吹べき木のもとは今ちりなんと思ふことのも（同）「家の風ふきつこへけるかひありてちることのものめづらしきゝな（同）「家の風ふきつこふともこゝのうらにかひあるおとのもにてこそしれ

いへのつこへ　家傳（源わゝな）上、百四　何事も人にことなるけぢめをもゐるしつこふべきなり家のつこへなどにかきとゞめいきたらんこそ興はあらめ家につこふる（夫）卅爲家「いゝにせん家につこふる名のこしていふにもたらぬ大和ことのも

いへのうち　家内（源そゝきゝ）六　家のうちをかざり人におとらじと思へる（同）七　家の内にたらぬ事などもこなゝめるまゝに（同をとめ）十五　おとらぎさゝえこる御家の内なり

いへのぐ　家の具（宇治拾）四、四　鍋釜鋤鍬からせきなどいふ物にいさる迄家の具を舟に
とりつゝて　家の具足　家の物のぐ（同）二、廿九　家の具足どもおそせもさせて　云々　家の
物の具一つも失ハぎして
いへのこ　家の子　○契沖云日本紀に良家子と書てうまひとのことよめり縉紳をうまひととよゝさり高家なれバ家の子といへり（万）五、卅一　家
の子とえらび給ひて（うつそさゞそ）たゞ君のおり給ふ所に五位六位ひざまづき
かしこまる山伏見て是ハいとかしこき人哉家の子なるべしと思ふに（かけろふ日
記）上下十九　いとやんごとなきにハあらねどいやしからぬ家の子ども何のぞうの君な
どいふものども　云々　あなさの岸に家の子衛府のせけなどかいつきて見おこせさり（
源もゝぢのゝ）初　舞のさまてづゝひなん家の子ハことなる（同あづまや）十　故大將
殿にも　云々　家の子にて見奉りしに（枕）二、廿一　實方の兵衛の佐なゝあきらの侍從など
家の子にて今せこし出入りさり（同）六、十六　内外などゆるされさる若き男ども家の子
など　云々
いへで　是ハ他出せるをいへるゝ万葉のハ出家の心也（詞）雜上道濟「さびしさに家出しぬへき山里をこよひ
の月に思ひとまりぬ（万）十三、十三「世の中をうしと思ひて家出せしされやゝへりて何
にゝならん

補　いへこと　家言（万）廿、廿三「いへ風ハ日に日にふけとさきもこゝいへこともちてく
る人もなし
いへあるド　家ぬし也（源よもきふ）八　かの家あるド大貳になりぬ（同玉ゝつら）十八　家ある
ドの法師（後拾）秋上　家あるドハそゝに侍りて
いへのミち　家の道（夫）廿七、後九條内大臣「玉つしまミゲくミことにあふ鶴ハふりてや家のミ
ちもひらけん
いへのひと　家の内の人也、召つゝふ人をもいふべし（竹とり）こゝゝしこよりのぞきゝいま見あへり　云々
家の人どもに物をざにいもんとていひかくれどもことゝもせに（同）六衛のつゝさ
合せて二千人の人を竹とりが家につゝもせ　云々　ついぢの上に千人屋の上に千人家
の人々いとおそくありけるにあハせて　云々
いへひろし　家族の多きをいふ（竹とり）左大臣あべのミむらドハ寶ゆさゝに家ひろき人に
そイておハしける
いへびと　家人○召つゝふ人又家にしさしく出入せる人をもいも（いせ集）前栽うゑて砂こひけるに家人にも
あらぬ人の奉らんとてせなでおこせさるにあきゝさの少將なりけり（順集）一條藤
大納言石山にまうでゝ七日さふらひ給ふ家人の詩作り歌よむあまさ侍り　云々　侍從

成信さへりありてつゝうまつらぞ（源せきや）四 むゝしのやうにこそあらねど猶ゑ
さしき家人の内にかぞへ給ひけり
いと（古事）上九 甚久難待（遊仙）太無情（白文）最の字をよめり（万）七、卅二 思ひあまり痛もそべ
なミ（いせ物）初段 いとなまめいさる女云々 いとしこなくてありければ（同）七段 波の
いと白くさつを見て（源きりつゞ）初 いとやんごとなききへにへあらぬが（同）いと
あつしくなりゆき（後撰）雜三小町（大和物語）「岩の上に旅寢をそれへいとさむし苔の
衣をこれにかさなん いとも（源松風）八 いともゆゝしやとて（同をとめ）ニ かさちの
いともきよらなるにそへて いとなん（同）廿六 いとなんくちをしき いとこそ（拾）戀四
「思ふとていとこそ人になれざらめゑゝならひてぞミねばこひしき いとしも（源と
こ夏）十三 いとしもうらミ聞え給へば いとかく（古）戀五「忘れ草さねとらましをあふ
ことのいとかくゝさき物とありせば いとせめて（古）戀二小町「いとせめてこひしき時
へぬば玉のよるの衣をかへしてぞぬる いとよく（源うつせミ）三 いとよく見いれら
る いとも〳〵（同松風）七 若君へいとも〳〵うつくしげに いとへし ○ いとふの所に出せ
いといさく いさくの所 いともかしこし 次に出せ 補（万）三、四十四「わきも子ゝやとの橘甚近
くうゑてし故にならはやへまし（万）八卅四「天の川いと川なみへたゝねども云々（後

撰）戀二貫之「涙にもおもひのきゆるものならばいとかくむねへこがさゞらまし（万代）
「ひれふりしまつらの山のをとめ子もいとこれをゝりおもひけんゝも（千載）戀二雅光
「玉藻ゝる野島の浦のあまざにもいとかく袖へぬるゝものゝは（同）別、和泉式部「こゝれ
てもおなじミやこにありしゝをいと此さびのこゝちやへせし（隆信）「おもひこく
かさもなぎさによる浪のいとかく袖をぬらをべしやへ（万代）和泉式部「をしとおもふ
をりやありけんありふればいとかくをゝりうゝりける身を（玉葉）戀三丹後「つらゝら
ぬ心ぞつらきよそにてへいとこれゆどの歎やへせし（新千）春下忠朝「花ざにもちらで
こゝる、春ならばいとかくけふへをしまざらまし
補 いとしやも 甚早（續後拾）春上爲家「いとしやも春立くらし朝霞たなびく山に雪へ
ふりつゝ（風雅）秋下隆朝「いとしやもをしね色づくしつしものさむを朝けに山風ぞふ
く（新千）春上、後照倉院關白「いとしやも春來にけらし天の原ふりさけミればかをみたなひ
く（同）夏、法皇御製「いとへやも里なれにけり郭公卯花がきにをちかへりなく（万代）（續
古）秋上、關白前左大臣「いとしやも咲にゆふらし小山田のかりゆのやどの秋しきの花（新千）
秋上、後伏見院「今朝のあさけ袂をゞしき風さちていとしや秋のしられぬるゝな いとこそ
（後撰）戀一貫之「曉と何ゝいひけんこゝるをばよひもいとこそこびしゝりけれ（中務）

「雲ゐて君を見るべきよすづあれバちよもいとこそもるけりけり

いとゝ〳〵　いとふ　出そ

いとゝ〳〵　よバカハユシと又キノドクカハユサウナル意といさゝうのけぢめあり

〳〵う（落くぼ物語）一かの君のかくておわしまにをバいとゝ〳〵うおぼせや（源ゆきゝ）四見そめ〳〵心ざ〳〵いとゝ〳〵うく（同そつね）十二末つむの事をかゝる方にもおほ〳〵かべての人からぬいとゝ〳〵くかあ〳〵き人の御さまとおぼせバあれをにいとゝ〳〵げ（同てあらひ）十七尼にあ〳〵給ひてよ云々いとゝ〳〵げ（同ゆきゝ）卅此香うせなん時に立よさまでいうでうさいあ〳〵奉らん○いとゝ〳〵（同ゆきゝ）四十り給へと高やうにいふを聞過さんもいとゝしバ（同うつせミ）六かく打とけうる人のありさまゝ云々何心もなうさやうあるいとゝ〳〵あがら（同ゆきゝ）廿四あるいとゝ〳〵うぐさるやうにも侍る哉とくるゝがり給ふいとゝ〳〵く（うつゝ櫻の上）下六十八酔のむまねして打こぼ〳〵つれバいとゝ〳〵くてえ又もおひ（源ゆきゝ）四十猶いとかきさえて思ふらん事のいとゝ〳〵く御心よかゝりていとゝ〳〵げ（枕）一〇かくか笑ひそいときをくあるものをいとゝ〳〵けまと制〳〵給ふいとゝ〳〵き（源ゆきゝ）卅四ひさ〳〵うぞへてうさり給へるに方ふさげて

ひきうげへゝうざまへとおぼさんいとゝ〳〵きあるべ〳〵いとゝ〳〵さ（同）十五小君いといとゝ〳〵さにねぶるくもあらでまどひありくをいとゝ〳〵を（同）卅四男も女もわろものいわづうに〳〵れる方の事をのこりなく見せつくさんと思へるこそいとゝ〳〵けれ補（大和）これもかれもいとゝ〳〵きうざありといふ（宇治拾）九廿うさせん事いとゝ〳〵くおぼえけきい

いとゝ〳〵む（山家）下「これのみぞこう心をバいとゝ〳〵むあれむ人のあきはつけても　いとゝ〳〵を　体の語（白文）十ノイトホンミ恩愛子とよめり（源ゆふ）十六女君きえのこりさるいとゝにこゝろ給ひて

いとゞ　いよ〳〵こゝろ也甚し（古）雑下ありひら（いせ物）百廿三段「年をへてをこ〳〵里を出ていかバいとゞ深草野とやありあん（後撰）六「こえぬそふ名をおうらみそ鈴鹿山いとゞまぢうくあらんと思へバ（源きりつぼ）五いとゞあれいう宮の内いとゞ狐のをこうにあざてと御覧ぢて（同よもきふ）三もとよりあれさりうとまゝう（同玉うつら）廿こゞよいひもいとゞおぼえてもづうけれど（同椎が本）卅くれもてあバ雪いとゞ空もとぢぬべう侍りと云々

補　いとゞあを　哀傷「いとゞあを泪のいろの深きうあふさゝびきつる墨染の

袖（新拾）雜上範空「いとゞなゑゆき、もだえて世をいとふ山のゝひある庭のしらゆき

補 いとゞや（赤染）「れきなゝれ水ハいとゞやぬるゝらんことはなるを人のくめゝし（散木）「あさにおきしゑもとにさはもぬきしゝがいとゞや袖のくちもてぬらん

補 いとゞまさ（新後撰）秋上、法皇御製「いとゞまさをりてぞまさる秋もれの花れにしきの露のさてぬき（同）雜上國助「いとゞまさひゝりやそもん白露に月まちいづるゆふがゑのもな（新拾）冬爲子「いとゞまさ雪にハ跡もなゝりけり人めゝれにし庭の冬草（同）同、後嵯峨院「いとゞまさかぎりも見えぞむさしのやあまぎる雪のあけぞの、空

いとゞしく 意ハいとゞは同（いせ物）七段「いとゞしく過ゆく方のこひしきにうらやましくもかへる波ゝな（六帖）六上（後撰）秋上「いとゞしく物思ふ宿の荻の葉に秋と告つる風のさびしさ（同）秋中、近江更衣「五月雨にぬれにし袖にいとゞしく露おきそふる秋のさびしさ（源さしひめ）五あれまさるをつれ〳〵とながめ給ふ云々草青やゝにしげり云々いとゞしくさびしくよりつゝん方なきまゝに いとゞしう（同さゝき）十九つゝさ位ハいとゞしう何につけてゝハ人めゝんいとゞしき（同タゝゑ）四十道いと露けきにいとゞしき朝霧に（同さゝき）五十五宮ハいとゞしき御心なれバいと物しき御けしきにて（同藤のうらさ）十四思ふやうなる御なゝらひなめれバ水ももらんやハあるゞのおとゞもいとゞしきちゝまさりをうつくしき物におぞして

補 いとゞも（躬恒集）「月見つゝをるすべもなきさゝやどにいとゝもきなくゑとゝぎすゝな（散木）「ゑとゝぎすなゝぬなげきのもりに來ていとゞも聲をゑゝめつるゝな（後拾）秋上師賢「さらでさに心のとまる秋のゝにいとゞもまねく花すゝきゝな（輔親）「君が代のつくべくもあらぬ長もまにいとゝもおふる松のちよゝな（壬二集）「かりにさにたづねし人の跡さえていとゞもしげる深草の里

いとたけ（八雲）管絃、いとたけ（夫）十八爲兼「立ゝへる雲井の庭の神ゐそび糸竹のねも月にすゝけり（同）入道前太政大臣「神風やゝもすそ川のさゝ波に聲をあハするよるのいとさけ

いとなむ ミづゝら其事をするをいふ（源さゝ紫）四十四物ぬひいとなむけもひしければ いとなゝ（同しひゝもと）十四心ゆきさるけしきにて物ぬひいとなゝつゝ（源さゝ紫）十九御くさ物何くれと谷の底迄ほり出いとなゝ聞え給ふ（同やとりき）三いにしへよりつさもりける寶物ども此折にこそハとさがし出つゝいとなゝ給ふに おぞしいとなゝ（同きりつゑ）廿六ゐさちおぞしいとなゝて限りある事に事をそへさせ給ふ かしづきいとなゝ（同もゝちのゞ）十二見奉り給ふ時うらみも忘れてかしづきいとなゝ聞え給ふ

補（赤染）「夕ぐれハくものいとなむすがたゝなやどもなき身の心ぞそさに（月清）四「千世經べき松さへ山を出にけり春をいとなむ賤にひゝれて いとなミ（狹衣）上、下いつしゝと此御いとなミをこそハおぞしまうけしに（源梅ゝ枝）二いとなミ給ふにそへてかさ〳〵にえりとゝのへて（玉葉）雜一西行「年くれしそのいとなミハコそられてあらぬさまなるいそぎをぞする（同）雜二「おきてけさまさ何事をいとなまん此夜明ぬとからになく也（月清）「日をへつゝすがくさゝゝ一そぢにいとなミくらそもてをしらむや

いとなはせば（宇治拾）十五、十七食物下人どもにもいとなませぞ

いとなミ 体の詞シワザ職分をいふ（源タゝゝ）十八あやしき賤の男の聲々 云々 おのがドゝのいとなミにおき出てそゝめきさゝぐも 世のいとなミ（同ハしひめ）廿九あやしき舟どもに柴ゝりつミおの〳〵何となき世のいとなミどもに行ゝふさはの 常のいとなミ（同ミをつくし）廿 御行ひくどくの事を常の御いとなミにておハしまに 朝夕のいとなミ（狹）四、下四十一あしさゆふべのいとなミまハ此二所の御事をおぞしめしたり

いとなき いとまなきをいふヤスムマノナキ也（後撰）春中、宮道高風「春の池の王藻にあそぶ鴛鳥のあしのいとなき戀もする哉 いとなく（兼盛集）（後拾）春上「一とせにふさゝひもこぬ春なれバいとなくけふハ花をこそ見れ（躬恒）「そぐしこし年をいくらとかぞふれハ指いとなくも老まける哉（源うつせミ）七 春ならぬこのめもいとなくなげゝしきに いとなゝりける（謙德公集）「よるハさめひるハながめにくらされて春ハこのめぞいとなゝりける（古）戀五「哀ともうしとも物を思ふときなどゝ泪のいとなゝるらん いとなげ（枕）十二十五いとなげにてこゝかしこゝやんでとなきおぞえあるこそ法師もあらまゝしきさゝなれ 補（後撰）秋下貫之「日ぐらしの聲もいとなく聞ゆるは秋夕くれゝなれバなりけり（貫之）「なげきこる山とゝゝ身ハなりぬれバ心のミこそいとなゝりけれ（万代）「時くれバ民もいとなしそが原やふしミの里にさなへとりつゝ

いどむ あらそう也（古事）中廿三 各中挾河而對立相挑故號其地謂伊杼美（イドミ）今謂伊豆美也（崇神紀）七 各相挑焉（イドム）（源よもきふ）八 人よいどむ心よハあらで いどミ（同もミちのゝ）卅一 むゝなき事につけてもいどミ聞え給ふ（同朝ゝゝ）十四 いどミ給ひし女御更衣（同竹川）十八 人々皆いどミねんド聞ゆ いどミ 体の詞（榮花山）十八 女房さち碁双六のゝどの御いどミもいとをゝしくて（同若枝）五 おとらんまさらんのいどミむねさゝがしゝるべし いどミ顔（源ゝさる）十二 おの〳〵いどミがゝなるもてなし見所あり いどミ所（同藤のうらハ）十九 殿上人などもめづらしきいどミ所にてとり〴〵にさふらふ人々もこゝろを

りけさるに云々 いどまーき（同ミもき）十六 よそ〳〵にてこそもりなき事につけていどまーき御心もそふべけれ いどまーさ（同末つむ）初 こゝもかーこも打とけぬ限りのけーきぞミ心ぶりき方の御いどまーさに 補（枕）十八、十 何くれといどむ事に勝さる

補 いとのきて（いとゞしくに同し）（万）十二、七 「いとのきてうもきまゆねをいさづらにかゝーめつゝもあもぬ人りも（同）五 いとのきていさきゝにはからーやをそゝぐちふゲでとく（同）十四、卅二 「なるせろにこつのよになにいとのきてかなーけせろに人さへよにも いとくらへ 糸競、琴にいへり（うつや 吹上）下四、十四 それも感ぐさる手侍るなり侍從の朝臣と糸くらべーてそれをなんひき侍らぞなりにー

いとま 閑暇の暇也ヒマ（古）序 よろづのまつりでとを聞ーめすいとはもろ〳〵の事をもせて給へぬあまりに いとまある（万）十、十二（新古）春下 赤人 「百敷の大宮人へいとまあれや梅をかさーてこゝにつどへる さくら、けふもくらしつ（新古今） いとまなく（落くや）一 落くやの君まーていとはなくくるーき事まさる いとまなき（源さゝきゝ）卅二 かさき詩のこゝろを思ひめぐらーいとはなき折に（同末つむ）廿一 いとはなきやどぞやさりなーと打なげい給ひて 心のいとまなき（同ありし）四十四 猶よとともにかゝる方にて御心のいとまぞなきや いとまなミ（万）三、廿 「しがのあまへめりしややきいとまなミ云々

いとまもミえぬ（夫）三天延二年云々 「谷風れ吹上にさてる玉柳枝のいとまもミえぬ春哉 いとまいる（うつや 樓の上）上十一云々 それにいとまのいるべく侍るぞ（源うめりえ）十七 好ミかき給へるひらもあめり目も及バぞまれへいとはいりぬべき物なりと興ぐめでさせ給ふ 目のいとまいる（同さりな）上、七十九 かなぶみ見給ふるへめのいとまいりて いとまのひま（順）七日さふらひ給ふ家人の詩つくり歌よむ侍りいとまのひまにからの歌つくりやまと歌よむ（源さりな）上、百五 けふのやうならんいとはのひまゝちつけて（枕）十二、廿一 あそも御いとはのひまにハ物せさせ給へ いとはのひまぐ〳〵（狹）三上、十八 此頃ぞりり御いとはのひまぐ〳〵に此ひがことどもを直させ給ひてんや 補（万代）「狩人のいとはもいもぐ草さりみあさるきゞにのかくれなければ（隆信）とー月をみさる人にいとはをこひて（濱松）四下 いとはきこえ給ひて（源薄雲）十一 のどりなる御いとはのひまなどにハ

いとま 俗にいふ暇をねがふ暇をやるなどの暇也。又常のいとま乞にもいへり（源きりつや）六 まりでなんとー給ふをいとま更にゆるさせ給ひぞ いとま申 いとま乞也（景行紀）十六 將誅諸叛者故辞之（イトママウシス）（竹とり）おややけにハ筑紫の國にゆあミにまりらんといとは申て（玉葉）雜五 鳥羽院に出家のいとま申侍るとて 西行歌云々 いとま聞ゆ（同）（源よもきふ）十七 忍びてさいの上に御いと

ま聞えて出給ふ　いとま文　病みどにて辞職の願書也（うつ不 藏開）下、十一 大將のぬし詞 志かしこし 例煩ひ侍るかく病煩ひてあん日頃いとまぶみ奉りて參らぬ侍り（同 さつのむらとり）一 いとまま文出されてひさしくなりぬと聞つるハ何事ぞ

いとまま　忌服の忌也仕ふる身の引籠り居るを暇といへり（弁）を見るべし（うつ不 國ゆづり）中一、十二 御ぐしおろし給ひてかくれ給ひぬ云々 かくて殿のきんさちおとゞも御いとはにおり給ひぬれハ藤壺もよさりまうで給ひあんとす

補 いとけおとし　ナサナキ也（續千）釋教法爲 「おらでこそむそひれきけめあげまきのいとけなこのりしそどのちさりを（後拾）賀 公住 「いとけなかれ衣の袖ハせもくともこうの石をバなでつくしてん

補 いとけのくるま　糸毛軍（うつ不 藏開）中四 十九 民部卿の御方にあんあさらしきいとけのくるまつくりてあんめるを

いとふ　厭（拾）雜 戀 「あやまちのあるりなきりをいとふにすれ いとふまもる　宣長云まもるハタばえあどいふもえ也（後撰）戀二（拾遺）戀五 「あやしくもいとふにもある心哉いりまーてりハ思ひやむべきさも（拾）（源とこ夏）廿五 くれまも參りこんと思ひ給へさつハいとふにもあるにや侍らん（同さゝらひ）十二 いとふにもえてのび侍る命のつらく　いとひ（夫）八 慈鎮 「人まさバいとひやせまし庭の草にあお所せの雨のけしきや（金葉）春 雅定 「ちりそてぬ花のありりをあられバいとひし風そけふハうれしき　いとひ出（千）雜中、圓位 「いづくにり身をかくさまし いとひ出て浮世ふ深き山ありせバ　いとひもある（源ハ一ひめ）十四 さバいとひもなれよとこと更に佛おどのすゝめおもむけ給ふやうなるありさまにて　いとひそて（同うしハき）廿九 まことに御心といとひそて給ひけるともづりしう　いとひ詞体の（同あうし）十四 人しげきいとひハし給ひりどこゝハ又さまことに哀なる事おそくて　いとへ（新古）戀二 後成 「うき身をバされさにいとふいとへさバそをさにおおふ心と思ハん　いとハん（同）雜中 西行 「山里にうき世いとハん友もがなくやしく過し昔うさらん　いとハる（古）戀五 友則（六帖）四 「雲もおくなぎさる朝のされあれやいとハれてのミ世をバへぬらん（後撰）戀六 源よしの 「いとハれてりへりこしちの白山ハいらぬにまどふ物よぞありける　いとハしき（源さうき）卅 常ハいとハしき夜の長さを（後拾）春上 永源 「櫻花さうバちりおんと思ふよりかねても風のいとハしき哉（新古）雜中 家衡 「いとひても猶いとハしき世ありけりよし野のれくの秋の夕くれ　いとハく（源てらひ）四十六 おどて身をいとハしく思ひむすめけん 補（新古）冬 慈圓 「年のあけてうき世の夢のさむべくハくるともけふハい

をむざらまー 廣足云此いとをむざらまーを俗にクルシウゴザラ、ヌカマヒマセヌト云ズニあらむといふ意也是本義の一轉ー（美濃の家裏）云々又いとふといへるも叶もさるまて此頃よりいひあらへるあらん

にそへていとふとは物まても事まてもあるをおくまてありれと 廣足云コレイフトノ本義也おもふをこそいへ（尾張家苞）世をいとふと云世界のあるをおくまて劫火まてやけもうせねとおもふまいあらぢき世中をあぢきなう 廣足云ウトミキラフナリ少シタガヘリおもふ事なれバいとふの説叶ぢ 廣足云然ズいとふといふ俗にいやなといふ詞まある世をいとふ云世上がいやな也 廣足云キラヒ（美濃）年の暮る拔いとふ云年のくる、がいやな也 廣足云キラフ（美濃）年のくれもくをいとふ 廣足云シタルナリといひがまー年あらバ來るをいとふ 廣足云本義いふべしこれよく人の誤る事也心得おくべしー（尾張）いとふといふ詞を心得あやまられ 廣足云本義ノミチ思ハレタルナリたる故此論ミあるなれぢ（義濃）此結句いあげクざらまーとあるべきぞ（尾張）あらいひてい追切ありいとはざらまーとのどやかによそさるが作者の本意也（美濃）（後撰）ま「花しー」あらバ何クも春のをしらんくるともけふいなげクざらまーといふ歌ある故まもてこしらへられさるにや（尾張）正明い此歌まい心もつクでまませ給へるなるべしーとおもふ也（美濃）もーをクらバをしーまざらまーとこそあるべけれ（尾張）あげクざらまーよりいやゝもるやクや也されど猶のどやク

にいとむざらまーといへるあんよき 廣足云コレハ一轉ノ方ニテ思ヘル心也後撰集云ーと云ヘシ一首の意い年ゞ明けて浮世の夢ゞ覺てさとりをひらく物ならぢことしのく頃ノ人ナラバ花ーあらバノ如ク必あげクざらる、もいやでもあるまい 廣足云カマハザラト思ハシ也（新古）旅西行「世中をいとふまでこそたらめかりのやどりをしむ君らな（同）同遊女妙「世をいとふ人としきけぢかりれやどお心とむなとれもふぢクりぞ（同）雜下寂蓮「身のうさをおもひしらぢバいクらせんいとひながらもあすぐをクなら

補 いとふにもゆる（源さゝらひ）十二（河引歌）「おくさのこまを田のいけの柳ぬなも、いとふにもゆるものなぞありける

いとこ（和名）二從父兄弟爾雅云兄之子弟之子相謂爲從父昆弟 伊止（古事）八矛 神歌伊刀古夜能いものこと（万）十六 伊刀古名兒乃君（古）誹諧いとこありける男によそへて人のいひけれバ（いせ物）六段これい二條の后のいとこの女御の御をとにつクうまつるやうにてる給へりけるを

いときなし 幼（源きりつぼ）廿九「いときなき初元結に云々（同夕顔）卅五いときなづさひーもの、（四條大納言）「命をぞつぐといふあるいときなき袂かな、るけ

ふのあやめハ[いとけなし](夫)卅一基俊「いとけなきこゞ子を奈良の里ゝおきてこよひの月ゝおもゝげゝさつ

[いとゆふ]遊糸(六百番)隆信「春くれバなびく柳の友顔にそらにまゞふやあそぶいとゆふ[あそぶいと](同)李經「つの國のこやのこゝりのなゞめにハあそぶいとさへひまなゝりけり[補](圓珠庵雜記)(和訓栞)(さよしくれ)などの説考ふべし(狹衣)一上いとゆふゝ何そと見ゆるうすき衣を中將の君に打ゝけて

[補][いとめ]糸目(躬恒)「青柳のいとめも見えず春でとに花のよしきをされゝをるらん

[いとミづ]糸水(八雲)軒の玉水也(堀川)顯仲「五月雨のもれせぬころハあしのやの軒のいとミづさえせざりけり[補](新續古)春一堯仁「春雨に軒のいとみづなゞれ日のかさふくやども見えぬ空ゝな

[いともかしこし]コトノ外ニオソレイル(拾遺)雜春(遍昭)「まてといもゞいともかしこし花山にしもしと鳴ゝん鳥のねもゞな花の山(遍)[いともかしこき](源末つむ)卅心をつくしてよミ出給へらんやどをおやすにいともかしこき方とハこれをもいふべゝりけりとやゝゑミて見給ふ(同あゝし)廿四いともかしこきハゐなゝびて侍る袂ゝつゝミあまりぬるゝや

[補][いとすぢ]糸筋(長方集)「春雨のいとはぢよこみ云々

[いち]市(万)七ノ廿五「西の市にさゞひとり出て目ならバはかへりし絹のあきしこりゝも[いちの中](濱松)四市の中にてこそまことのひゞりハ無上菩提ハとりけれ(いちの溝)(散木)下九下藺ゝこえられて叙位のおくにかきつけ侍りける「數ならぬこゞ身ハ市のミぞなれや行ゝふ人のこえぬなけきバ

[いち]一(枕)五ノ廿六思ふべしやいなや第一ならずバいゝゞと問ハせ給へり云々すべて人にハ一ゝ思もれずハ更に何ゝかせん云々二三ゝてハ死ぬともあらゞ一ゝてをあらん云々第一の人ゝ又一ゝ思ハれんとこそ思もめと仰せらるゝもいとをゝし[一ハ](うつや初秋)上ノ七只今の琵琶の一ハ頭少將こそもべめれ[一にて](同藤原の君)ふミを一にてよむそれならぬ物もかしこき人のはるこざせぬなし(同藤のえん)上、十二かの人ハ只今の世の一ゝて内ゝもこゝゝも雲井よりふりさるよりもことに思ひ聞え給ふと[一なり](同祭の使)四十二作りハさゝさィせるふミそおもくの中にすぐれさり衆の中ゝ只今一なり[一のざえ](源ゑ合)廿一きんひゝせ給ふ事なん一のざえにてつぎゝハ横笛びもさうのことをなん云々(狹)一上十六こよひの宴にハさふらふ限りの人一の才(ザエ)を手の限りをしまでひとつづゝおゝろミん[一の物](源こゝゝな)上、六十七ふるき代の

一の物と名あるかぎりは皆つどひ參る御賀になんあめる【一の后】【一の大臣】(濱松)一
一の后の父一の大臣【一の大納言】(江次第)二七公卿等參集云々一大納言來ル云々(狹)
四下卅九宰相の中將は此頃一の大納言にて春宮の大夫かけて物し給ひける【一祢宜】(續
後撰)神祇大神宮の一禰宜にて年ひさしくつかへまつる事を思ひてよめる【一の内侍】
(禁秘抄)下二掌侍六人正四人權二人自上古有之此内以一内侍爲勾當隨補日爲一二也云々【一の御
臺】(雲圖抄)弓場始次第藏人頭爲倍膳先取一御臺云々【一の上卿】【一の導師】など同書に見也【一の寶】
(宇治拾)十四十三あしき波風にあひぬれば船の中に一の寶とおもふ物を海に入なるに
【一のこと】これらの類猶次に出せ
【補】【いぢ】意地(大かゞみ)心いぢにておもせし殿にて
【いち〳〵】一々(雲圖)弓場始次第次所掌一々唱名(榮ひら枝)十七かうでいかにぞやきのふの
宮の大饗いかゞありしととひ聞えさせ給へもしへしやうしかゞ〳〵といち〳〵に申
させ給へば云々
【いちもん】一番(八雲)一歌合子細一、一番左は可然人得之云々(枕)七廿四、なぞ合の所に左の一
番はおのれいはん(同)八廿たのもしげなき物、一番にかつ双六是ら初の一番也次に出しさるは碁也【三番
に數ひとつ】(源竹川)十八三番に數ひとつかち給はん方に注三番に二番勝さる也(同やとりき)六

三番に數ひとつまけさせ給ひぬ
【補】【いちも】一半(拾遺)雜「すくろくのいちもまたてる人づまのあもでやこなんものに
やはあらぬ(東鑑)四一半錢目勝以下云々
【いさもやき】スルドイ、キビシイ、ケハシイ、ハゲシイなどのこゝろなり(延喜式)鎮火祭御心一速比給波志止爲氏(欽明
紀)廿嚴忌(古事)上卅八道速振荒振國神等とあるも同言なり(いせ物)初段むかし人はかくいち
もやきこやびをなんしける(かけろふ日記)下中、廿四見れば文詞此月日あしかりけり月
たちてとなん暦御覽ゞて只今もの給はせるなどぞかいさるいとあやしういちもや
き暦にもある哉云々此文かく人のそらごとならんと思ふ(源そま)五今は世の中も
ゞかるべき身にも侍らねどいちもやき世のいとおそろしう侍るなり(同)廿一さしあ
さりてはいちもやき世を思ひもゞかりて參りよる人もなし【いちもやく】(うつほさ
かの院)八十九大とこさちちかうさふらへど加持高うもせさせ給もぞよさき人はそ
れにまどひ給ふ物そとてこそかによませ給ふ眞言院の律師一人いちもやくよむい
とこふとし(かけろふ日記)下上十八家にかへりて打ねさるほどに門いちはやくたゝく
むねつぶれてさめされば(同)下中三蟬のこゑいとしげうなりにさるを云々俄にいち
もやうなきされば(同)廿四此時もぎさる鶯のなき〳〵て木のたちからしにひとく

〳〵とのミ（イナシ）いちもやくいふまぞもざれおろしつべくおぼゆる（源さゝき）十七院のおもしましつるよこそ憚り給ひつれ后の御心いちもやくてかさ〳〵おぼしつめさる事どものむくひせんとおぼもべゝめり（大和物）二平仲ふくゝらぎ思ふさゝき女をめのもとにゐてきておきさりけりにくげなるまとどもをいひてめつひに追出しけり云々妻いちもやくいひければ女ニ近くさにえよらで（宇治拾）三十九其頃熱田の神いちもやくおもしましておのづゝら笠をもぬゝぎ馬の鼻をむけ無禮をいさも者をばやがてさちどころに罰せさせおはしましければ

いちもやき（盛衰）十七天性入道は善事にも惡事にも前後をばゝへりミぎいちもやき人にて心の中に舞のをはるをおそし〳〵とぞまち給ひける

いちもや（散木）下、廿六「えち川に岩こは棹のとりもあへずおとも筏のいちもやの世や

いちにち（一日）（源ゆめの浮橋）十四、僧都文の詞一日の出家（スケ）のくどくはもゝりなき物なれば

一日一夜（同ミのり）十四一にち一やにてもいむ事のあるしこそはむなしゝらぎ侍るなれど（河海）觀音經云一日一夜受持八戒齋

いちど（一度）（うつゑたづの村とり）十八かくて御使の君一度にかへり給へり（枕）五ノ九まして さと一度に笑ひなどしたるいとれそろし（濱松）四一目も見奉りさりなき御文もいちどかよひぬる人必はぐい給はは（榮花山）廿二二三度が中に御かへりは一度などぞ聞えさせ給ひける（大鏡）四でう六出ことてうたせ給ひけるにたゞ一度に出くる物ゝ

一二度（宇治拾）四、十一二度ひとやにいらんさに人としてよゝるべき事ゝも

いちゞ（市路）（夫）卅一寂蓮「大和なる三輪の市路にいそぎてもいつ迄世にはふるの山こえ

いちぢやう（一定。たしゝなる意也）（宇治拾）五、九其人の一定子とも聞えぬ人ありけり云々此子といふ人こそ一定のよしいひて親の家にゐさなれと聞て（同）十、一一定もなき事なればゆるし給ふよし

いちぢやう（一丈）（枕）十、廿一櫻の一丈ばゝりにて（宇治拾）三、十二一丈ばゝり濱になげあげられぬ

いちり（一里）（拾芥）中、末自京陸奥際、行程三千五百八十里、六町爲一里定（竹とり）天竺に二つとなき鉢を百千万里の程いきさりとも

いちをなす（市を成す）（夫）卅一、權僧正公朝「引ゝへて雀の網をかけてはりこや市をなは門と見えける（新六帖）六、よもぎ、知家「世にしあらば行ゝふ人もいゝぎゝり蓬の門に市をなさまし（宇治拾）五、十四市をなしてぞつどひける

いちがふ 一合、量數又器の數にいふ（三代實錄）四十九、十六 白米三升二合、鹽三合、味醬二合（延喜神祇式）四時祭 鳴雷神祭一座 云々 明櫃二合折櫃四合（同）春日神四座祭、筥八合、鹽九合

いちだい 一代（更〜な）さるべき人々一代に一度の見ものにて

いちねん 一念（源よこふえ）十五 今ハのとぢめに一念のうらめしきにももしハ哀とも思ふにまつハれてこそハ長き夜のやみにもまどふべきさなれ

いちらふ 一臈 いちらふ藏人（雲圖）十一月五節事 一臈藏人爲行事有故障之時二三臈勤之（同書）ホ 二臈三臈四臈など見ゆ（新勅）雜二 一臈藏人にてかうふりのネど近くなり侍りけるによみ侍りける 源爲相

いちう 一宇（宇治拾）四、ノ十九 此村の在家こと〴〵くえやみをして 云々 此魚の主が家さゞ一宇其事をまぬかる

いちゐん 一院。院ハ仙洞の御事院二所おハしまを時さじめのを申奉る也こゝハ朱雀院を申奉る也（源さかな）上、七十 内春宮一院后宮つぎ〳〵の御ゆかりいつくしきネどいひしらぬ見えわさる事なれバ

いちのむし 一の橋（枕）七、廿一、加茂の事をいふ所ニ 少將といひける人の 云々 なくなりて上の御社の一の橋のもとにあなるをきけバ

いちのところ 一の所（職原抄）執柄者必蒙一坐之宣旨故稱一人又云一所（枕）八、七 くるし

げなる物一の所に時めく人もえやはくハあらねどそれハよかめり（源てならひ）六十四 世の中の一の所も何とも思ひ侍らぬたゞ此殿をたのみ聞えてなん過し侍りぬる

一の人（枕）五、三 めでさき物、一の人の御ありき春日詣（つれ〳〵）初段 一の人の御ありさまハ更なり

いちのたな 一の棚（枕）五、十一 おまへにさふらふ物ハ琴も笛もこなめづらしき名つきてこそあれ 云々 宜陽殿の一の棚にといふことぐさハ頭中將こそし給ひしか 抄。宜陽殿ハ樂器書籍等をおかるゝ所也

いちのくに 一の國（枕）九、七 おさり顔なる物、除目に其年の一の國えさる人の 云々

いちのくるま 一の車（枕）十一、三 御車でめに十五四つハ尼車一の御車ハからの車なり

いちのま 一の間（雲圖）五節事 皇后宮入内時童女居一間 同書に第一間、二間第二間第三間など見ゆ

いちのまひ 一の舞（枕）七、十九、臨時祭の所ニ 一の舞のいとうるハしく袖を合せて 云々 此さびやがて竹のうしろからまひ出て

いちのみや 一の宮 いちのみこ 一の親王。共ニ皇子を申奉る二の宮二の御子など順をおひて稱する也（枕）五、三 めでさき物、今上 一の宮（源きりつぼ）三 一のみこハ右大臣の女御の御腹にて

一の人 一の所 の傍ニ出セ 一の物 一の寶 一の才 一の后 一の大臣 一の内侍 これらハ いち一

の所は附を

いちくわん 一貫（雲圖）弓場始 進出取錢一貫一拜置机下皈入云々（うつゑ 國もつり）下、三十錢廿貫

いちくら 肆（和名）十 唐令云諸市毎肆立標題伊知久良

いちまい 一枚（江次第）五、四十七 毎布施加袈裟一條供養下文一枚（うつゑ 藏開）上、一、二 一枚も文見えず（源そま）廿九 白きからの紙四五まいぞりをまきつゞけて又（雲圖抄）は執筆座一枚。疊一枚。小筵二枚。葉薦一枚。圓座一枚。短冊三四枚など見ゆ。猶 まい の所合せミるべし

いちぶ 一部。よろづの書籍にいふべし（源ゑりな）下、七十五 日でとに法花經一部づゝ供養せさせ給ふ

いちぶつどやうど 一佛淨土（落くぞ）ニ衛門少納言一佛淨土にうまれさるにやあらんとおぞゆ

いちで（和名）十七、十二 覆盆子爾雅注云蕺葢覆盆也本草云覆盆子和名以知古（枕）三、十二 あてなる物、いミドううつくしき兒のいちでくひさる くちなもいちこ（枕）八四 名おそろしき物、くちなもいちで。くちなもいちごの季吟が傍注地楊梅とあり。しばくさ。雀の枕と俗はいへる物也とぞ 補（著聞）連歌「もる山のいちでさりしく成にけり

いちで 一期（つれ〳〵）五十九段 大やう人を見るにもこし心あるきもは皆此あらましにてぞ一期はもぐめる

いちこく 一斛。俗に一石とりけり（宇治拾）四、三 とく〳〵一石誦經はせよ（うつゑ 國ゆつり）下、三十 よね十石

いちこく 一刻（雲圖）御佛名次第 初夜亥一尅打鐘此頃は晝夜を四十八刻はとりちさる也同書は二尅二尅半三尅四尅など見ゆ

いちでふ 一帖。一冊一卷をいふ（源ゑ合）九 かさはなるまゞき一帖づゝさはがに浦〳〵のありさまさやりに見えさるを（江次第）五、四十五 上紙卅帖但馬。是は紙はいへり。又（雲圖）四方拜 立廻御屏風四帖往古或八帖云々とあり

いちざ 一座（八雲）一 もべて一座の連歌はいさく同事のおそりるは惡事なり（宇治拾）十三、廿二 諸僧一座より次第に鉢をとばせて物をうく

いちめ 市女。女商人をいふ（源玉りつら）十六 あやしきいちめあきびとの中にて（うつゑ 藤原の君）廿四 とくまちといふいちめのとめるあなり（六百番）寄商人戀經家「立くらもいちめもさこそなげくらめ心をかへて思ひしる哉（夫）卅三 「ゑりまなる市女がもてるかち布の云々 補（兼盛）京の人の家にいちめきさりさけうる「なよ竹の末のよおそきさたらひは市女もこれもかもらざりけり

いちめがさ　市女笠（枕）八ノ六　えせ物の所うる折の事、雨ふる日の市女笠（散木）下、四十九時房「市見れハ市女笠こそつきもせね

いちゑのあめ（法花經）譬如大雲雨一味雨諸草木各得生長。和泉式部の思ひの家とよめるも火宅をかねさる也（夫）十九、家集和泉式部「物をのゝ思ひの家を出てふる一味の雨にぬれやしなまし（後拾）雜六釋教「もろともにゑつの車にのりしかどされハいちゑの雨にぬれにき

ゑつの車　み

の部に注そてちゝ見るべし

いちゑるゝ　ハキトワカル意也（安閑紀）三建顯號垂鴻名又（白文）四十ノ三　著とよめり。万葉の後ハいちゞるしといへり（万）十二、二十「かくれぬのゑさゆこひあまりゑら波の灼然いでぬ人のしるべく（小大君）「ゑづがきのあさりになれぬきねよりも神にいちゞるゝ今ハかざゝゞ

い

ちゑるき（貫之）「いちゞるきゑるゝなりけりあら玉の年のくるゝハ雪にざりける（源ゝひかもと）十かの老人をバあハれなる物ゝ思ひおきていちゞるきさまならぜとかくまぎらハしつゝ心よせとふらひ給ふ（同てならひ）五十二一品の宮の御なやゑげにかの弟子のいひしもしるくいちゞるき事どもありておこさらせ給ひにけれバ

いちゞるく（躬恒）「雪の上に思ふ心ハいちゞるくつれなき人の目にもみえなん

い

ちゞるからぬ（枕）八一例の所などにてことにまさいちゞるからぬ人の聲聞つけさるハことゝり人などの其うへいふにまづこそ胸つぶるれ

補（金葉）雜上實光「みかさ山神のゑるゝのいちゞるくゑかありけりときくぞうれしき

いちひ　櫟（和名）十七、七　櫟子以知比相似而大於椎子者也（同）十七、十　櫟棣櫟其實、棣以知比乃加佐（万）十六、卅　此片山に二つさつ伊智比がもとに（夫）廿九爲家「大井川しぐるゝ秋のいちひさゝ山や嵐の色をかそらん實の名にて木をもいふ也とぞ（枕）七おそろしき物、つるもみのかさとあるを季吟云和名、十四櫟實也ドングリノカサの類なるべしといへり猶つるだゝの所に注そ（万葉）のいつ柴を契沖いちひ柴也といへり今も山里にていちひ柴といへる物ありとか。又（万葉）十二ゑ椎柴のなれハまさらでとよめり

いちびと（和名）二市郭兒伊知比止一云市人（夫）九、法印定圓「かきくらし思ひもあへぬ夕立ゝ市人さわぐゑこの山本

いちびめ　市姫。市を守る神なりとぞ（夫）卅一或所の屏風市びめのかさなどかける所爲頼「市ひめの神のいがきのいかなきやあきなひ物に千代をつむらん

いちもち　一物逸物。衆にぬけ出さる物をいふ（本朝文粹）八ノ卅三　三月三日、江匡衡、天下一物已上連賓榻於林頭（うつゑ梅の花かさ）一舞人ハ殿バらのきんだち殿上人ゑこのきんだちよりもドめて世の中に名だかきいちもちのものども（同くら開）下、廿六　内の御神樂のめし人左近のゑようまつかさ云々信濃のもけかねゑきなどもべて三十人のものどもこ

そハ只今の一もちにハ侍るなれこまらハ内の召ならでハたハやまく罷りありゝに
(同)卅八結願の御佛名けふハ比えの座主只今のいちもちをなん讀經の禪師さちも僧
綱さちも馬に(宇治拾)一、廿七のりさる馬いとかしこしとも見えざりつれどいミドき
逸物にてありければ(盛衰)十四馬のふとくたくましきが曲進退まして逸物なり
いりたつ 俗ニ入りコム又入りヒタルなどいふなどの意也。しさしきをもいふ いりたゝぎ(古事記)下、卅三「大君の心を
やらミをミのこの八重の柴垣いりたゝぎあり いりたつ(元眞)「こよひより荻の葉
風の音まらし秋の境にいりやさつらん いりさち(うつゝ 藤原君)一學問に心いれて
あそびの道にもいりさち給へる(源のさき)十一御參りのゝどなどさらハにていりさ
ちなれ聞え給へまば女房などもいとけうとくハあらじ(同かけろふ)五十二大將の君
ハいとさしもいりさちなどし給ハぬゝどにてもづゝしう心めるびなれ物ニ皆思ひ
さり(同)五十六さやうなる心ぞせある人こゝらの中にあらんやいりさちてふゝくミ
ねばしらぬぞゝし(枕)十ノ十四おゝやけ所にいりさちまる男家の子などハあるが中に
よゝらんをこそハえりて思ひ給ハめ いりさゝぬ(源しひゝもと)十都にハまさいり
たゝぬ秋のけしきを(枕)六ノ七山の井の大納言ハいりさゝぬ御せうとにてもいとよく
おハまゝし 抄、別腹にてしさゝゝらぬ也

いりうみ 入海(新撰六帖)三爲家「入海のせゞの崎なる高岩にうち波こしてある、汐風
(玉葉)秋下、大江茂重「もし立や松吹ゝさる浦風に入海遠くまめる月ゝけ 補(新拾)冬實超「ま
のれうらや入海さむき冬がれのを花の波にあゝる月ゝけ
いりふま 入臥(源末つむ)十六めのとざつおい人などハざうしにいりふして(狹)三上、卅八姫
君のお前に男いりふして侍り
いりこ 熬海鼠(和名)十九、十三海鼠和名古 本朝式加熬字云伊里古
いりこもる 入籠(新六帖)磯爲家「朝夕に鹽ミついその岩根松世にいりこもるゝどぞゝ
なしき(夫)卅三同「山のをれ行あひにせく池水のいりこもりしやさが身なるらん 補
(月詣)なげくこと侍りていりこもりけるによめる
いりえ 入江(古事)下、廿五「くさゝ江の伊理延のもちま 云々(後拾)雜五、伊勢大輔「こも枕ゝり
の旅寢にあゝさぞや入江のあしの一よばゝりを(新古)冬、式子内親王「見るまゝに冬ハき
にけりかものゐる入江のミぎハうま氷りつゝ 入江の澤(拾遺愚草)原ノマヽ
いりあや(河海)舞有取綾手故云入綾(花鳥)更に取てゝへして面白く舞ふ事也(源
もみちのゝ)五けふハ又なき手をつくしたる入あやのゝどそゞろ寒く此世の事と
もおぼえぞ(同さゝな)上、六十五らくそんのまひ出さるゝど 云々 衞門督おりていりあや

をゑのゝにまひて紅葉のゝげに入りぬる補（散木）「ゑと、ぎに二むら山をさづね見むいりあやの聲やけふいまさるゝ顯注舞にいいりあやとてさらにとてゝへしておもしろくまふことによせて云々

いりあひ入相（いせ物）四十段けふのいりあひばゝりにさえいりて又の日の戌の時ぞゝりになんからうゞていき出さりける（詞）秋兼昌「夕霧に梢もしえぞ初瀬山入相のゝねの音ばかりして（夫）卅四西行「入相のおとのしならぞ山寺いふしよむ聲もあいれなりけり（六百番）秋夕、經家歌云々判云入相ハ必しも鐘とはゑぞとも鐘とこそいと聞ゆらん云々

いりしゑ入汐（新六帖）鷺知家「いりしゑのひゝさにきゐるしと鷺をいさりに出るあまゝとやしん ヒキシホ也（夫）十七、二品のしこ「あなしふくとしはゞさきの入しゑに友なし千鳥月になくなり補（新後撰）雜中觀意「おくれてもあし分をぶねいりしゑにさもりしゑどを何ゝうらみん（万代）「秋風にしの浦こぐ舟人の入しゑ寒き有明月（新千）冬爲重「いせのうしのをの、湊の入しゑにながれ江とゑくなく千とりゝな（新拾）秋下爲藤「難波ゞさいりしゑちゝくゝさふきて月よりよする沖つしらなし（續古）冬光俊「霜ゞれによこれ、堤風さえて入しゑとゑく千どりなくなり（玉葉）春上實伊「難波ゞさおゑろ月夜のいりしゑに明ゞさゝもむあもちしま山（同）雜二範秀「浦あれて風よりのゑるいりしゑにおろさぬ舟ぞなみにうきぬる

いりひ入日（源花のえん）三やう〳〵入日になるゑどに（金葉）雜上顯季「ひぐらしの聲もゝりもる柴の戸ハ入日のさにはまゝせてぞしる補（風雅）春下、花山院「足引の山にいり日の時しもぞあまさの花ハてりまさりける（新續古）釋教頓阿「山のもれ入日をかへに袂にも西に心をかくるとぞ見し（同）同具行「山のもれ入日をいゝでゝへしけん我ざに西にいそぐ心を

いりもむ もしにもむ事也いりもし（源あゝし）七ひねもすにいりもしつる風のさはぎに（同のはき）六道をゞらいりもしをる風なれど（宇治拾）三ノ十三此人をめにせばやといりもし思ひければ（同）十一、十二いゝなる先世のむくいなりともたゞをこしのたより給候ハんといりもし申て

いりもまれ（狹）四、下、卅九宰相の中將ハ云々西の國のおゆ領とて母代にいりもまれ給ひしかど補（榮鶴の林）しづをあみ人しれぬぬゝをつき佛をいりもみたてまつる（宇治拾）十一、十二觀音をうらみ申て云々いりもみ申て御前にうつぶしふしたりけるよの夢に

いりぞみ（抄）煎炭。しめりをいり取りし炭にや（枕）八、四名おそろしき物、いり炭（同）八ノ十一心もとなき物、又とみにいり炭おこをいとひさしイも心もとなし

いぬ犬（源浮舟）六十九 夜ハいさくふけゆくに此物とがめする犬の聲たえぜ人々おひさけなどするに（枕）一ノ十四 此ねさる犬ふるひコなゝきて涙をたゞおとしにおとす云々 さハ翁丸といふにひれふしていミドくなく（同）二ノ七 忍びてくる人見知りてやゆる犬ハ打も殺しつべし（同）二ノ九 又犬のもろ聲にながく〳〵となきあげさるまが〳〵しくにくし（拾玉）七（夫）廿七 「おもひくまの人ハなゝ〳〵なき物をあハれに犬のぬしをしる哉（夫）しりぬる 家の犬 宿もる犬 里の犬 など（夫）廿七にミゆ 補（風雅）雜中院御歌 「あともなきしづゝ家居の竹の垣犬の聲のミおくふゝくして

いぬ 去。行き去る也。年月の過去るにもいふ いぬる いね いなん いにけり これらの類皆おなじ いぬ（枕）一九 よし〳〵又れやせかくべき事もぞ侍るまゝりさち侍りなんとていぬ（千載）雜上 基俊 「契りおきしさせもが露を命にてあハれことしの秋もいぬめり とりもていぬ（源かけろふ）七 鬼やくひつらん狐めく物やとりもていぬらん たちていぬ（拾遺）物名 「鳥のこハまさひなながらさちていぬゝひのミゆるハまもりなりけり 遠くいぬ（四條大納言）をけあきら遠くいぬべき事などいひて いぬる（貫之）「ゆく月日川の水にもあらなくに流るゝでともいぬる年哉（源夕ゝや）廿八 火あやふしといふ〳〵あづゝりがざうしの方へいぬるなり 出ていぬ（同さゝきゝ）四十八 小君が出ていぬるやど

に かへりいぬ（万）六ノ四十五 「ミゝの原國の都ハあれにけり大宮人のかへり去（イヌレバ）禮者 とりていぬ 飛ひていぬ いひていぬ いれていぬ おとしていぬる など（宇治拾）に見ゆ。此餘例してしるべし いぬる 過し日をいふ いぬる十よ日（源ゆゝ紫）十一 いぬる十よ日のやどよりコらハやミに煩ひ侍るを いぬるついさち（同あゝし）九 いぬるついさちの日の夢に いね（白文）十七、八 從師去（イヌ）ゆけよと下知の詞也（古）戀五そせい 「秋の田のいねてふこともゝけなくに何をうしとゝ人のかるらん（枕）四ノ九、使に向ひて清詞 いね今聞えんとて懷に引入れていりぬ いね〳〵（同）四、ひたちの尼が所に 笑ひにくミていね〳〵といふもをゝし いなん（古）雜下小町 「コぴぬれバ身をうき草の根をたえてさそふ水あらバいなんとぞ思ふ（枕）三ノ十六 大辨見えバ打まて奉りていなん物をといへバ 出ていなん（いせ物）廿一段 出ていなんと思ひて いなバ（古）別行平 「立コゝれいなむの山の峯におふるまつとしきゝバ今ゝへりこん 出ていなバ（いせ物）百廿三段 「年をへてもみこし里を出ていなバいとゞ深草野とやなりなん いにけん（源あふひ）十八 身をまて、やいにけんとうつし心ならぜおぞえ給ふ（古）雜下ミつね 「身をまて、いにやしにけん思ふより外なる物ハ心なりけり いにけり（古）秋下ミつね 「道しらバさづねもゆゝんもみぢバをぬさと手向て秋ハいにけり（いせ物）初段 奈良の京春日の里にあるよしゝてかりにいにけり（源未つむ）十八 お

らぎ顔してさが方へいにけり（大和物）五ノ十五 ぬきゝてかきいさきて馬に打のせてにげていにけり

いにし年 過し年也前に出しつ

いにし（万）三ノ五十一 さまづさのことざにつけぎ往（イヌル イニシ）君ゟも 補（隆信）「よをかさねなびきもてにし秋の田のいねとゝさらにいとふべしやゝ（万代）貫之「こんとしのさめにゝいぬる春なれどけふのくるゝゝをしくぞありける

いぬバしり 犬走。築地と堀との間をいふ（新六帖）二、ゟきゑ、信實「くづれそふやぶれついぢの犬バしりふまへ所もなきさが身ゟな（保元物語）門より西築地の犬ぞしりに打て出

いぬる 寐（源さゟ紫）四十六 かゝる朝霧をバしらでいぬる物ゟ（枕）一ノ七法師の事をいふ所に いぬるをも若きゝ物もゆゟしゟらん

いぬゟひびと 犬飼人（山家）上（夫）十八「あゝせつるこゐのもし鷹をきとゝし（本ノマヽ）犬ゟひ人の聲しきるなり招逸（チキソラシ）なるべし

いぬゐ 西北の間。乾（うつゑとしゟげ）此屋のいぬゐのもゝの方に

いぬくひ 鬪犬の事也（増鏡）九、高時が事をいへる所に朝夕好むことゝてゝ犬くひ田樂などをぞ愛しける

いぬふせぎ 犬防。佛前の格子をいふ（枕）六ノ十七、初瀬詣の所に 犬ふせぎの中を見いれさる心ちゝいゝぞ

くさふとく 云々 犬ふせぎの方より法師よりきて（更しな）清水にゐてこもりさり 云々 御帳の方の犬ふせぎの内に（雲圖）季御讀經事 四ヶ日間不可下格子（レレニ） 立ニ犬防ヲ於橋間ニ 補（枕）つゑねに出て犬ふせぎにすされをさら〳〵とかくるさまなど（宇治拾）十一 犬ふせぎのうちにさし入ておきぬ

いる 入。月日をもじめ家に入る、門又山に入る、物の中へ物のいるなど抄しつくしがさしおしてしるべし

いる（枕）六ノ七 日のいるゑどにおきさせ給ひて（金）秋公實「くもりなき影をとゞめバ山のもにいるとも月をもしまざらまし（夫）三、ゑつね「青柳をかざしにさして梓弓春の山べに入る人やされ（源さゟ紫）初、北山の所に まさ曉におもきや、深ういる所なりけり

いりぬ（同ゟつせゑ）三 もされのもざまにいりぬ

いりぬる（拾）戀五、坂上郎女「しゑゑてバいりぬる礒の草なれや見らくもくなく戀ふらくのおゑき

いりといりぬる（六帖）四「いゟバゟり戀てふ山のふゟけれバいりといりぬる人まどふらん

いりなん（枕）一ノ八 女房の車ども陣屋のゐねバいりなんやと思ひて

いりね（同）一ノ十 あけぬとならバたゞまづいりねゟし

いりにし（古）冬、忠ゑね「ゑよしの、山の白雪ふゑわけていりにし人の音づれもせぬ

いりにけり（拾）雜下爲頼「盗人のさつさの山にいりにけりおなじかざしの名にやけがれん

いりて（枕）二五 にくき物、硯に紙のいりてもられさる

いりさり（竹とり）翁持ていりさり

いりそむ（新勅）戀一「戀の山ーげき小笹の露さけていりそむるよりぬる、袖ゥあ
いりくる（玉）雜一下野「露さけし蓬の宿のひゥりにもいりくる月のかげをこそ見れ（
山家）上「梅ゲ、を山ふところにふきとめていりこん人よあめよ春風いりいて、
（枕）一、日いりそて、いりもてゆく（源ゑしひめ）十七いりもてゆくま、に霧ふさゲ
りて道も見えぬーげ木の中そわけ給ふよ いりもておもせ（同ゑゥ紫）初いりもて
おそするま、にいり方（同よもきふ）廿三月いりゲさになりて いる方（同末つむ）八
「もろともお大内山ハ出つれといる方ミせぬいさよひの月いらん（いせ物）九段さゲ
いらんとそる道ハいらて（同）五段門よりもえいらでいらぜいらぬいらね（枕）一、門
ちひさけれバさハりてえいられねバ云々さてもゥバりある家に車いらぬ門やハあ
らん云々車のいらざりつる事いひ待るいまる（中務集）「よと、もにもーそされつ
、さかために火にも水よもいれるる心ぞいり給ふ（源ゑゥ紫）四十門打さゝらせ給へ
バ云々君いり給へをいらせ給ふ〳〵敬そる詞也（同きりつぼ）十八よるのおとゞにい
らせ給ひてもまどろませ給ふ事ゥさーい。たゝ來らせ給ふ事をも いらせ給ふ といへり末に 附
内にいり給ふ 入内の事也（同あふひ）十八齋宮ハこそ内に入り給ふバゥりしをさまーさ
いる事ありて此秋いり給ふ 補（後拾）誰五重之「つねならぬ山の櫻よ心いりて池のもち

そそいひかもなちそ
いる 同語なれど是ハ他よりの詞也 さーいる（枕）八一、これ參らせんとて御硯かとさーいる いる、
（同）七ノ廿八きゝかげある物、油いる、物。 いれる といへるは俗あり いれて（竹とり）玉の枝を
バ長びつにいれて いれさる（源ゑゥ紫）廿その國よりいれさる箱のからめいさるを
さーいをさを（竹とり）つバくらめの巢に手をさーいれさせてさぐるに物もなー
と申を いれらる（同）からひつのふさにいれられ給ふべくもあらぬ御腰ハをれよ
けり いれを（古）雜下あり平「あゥおくにまたきも月のかくるゝゥ山のむまげていれぬ
もあらなん とりいれぬ（枕）六ノ五いそぎ立給ひぬ云々また御ゑとねも取りいれぬそどに
補（枕）九ノ廿三あゥ、ねのやを一かいらけいれて（後拾）雜五人のかめに酒いれて盃ふそ
へて歌よみ出ー侍りけるに
いる 俗にいふ入（落くぼ）一三尺の御几帳ひとつぞいるべゥめるいゥバせん誰にゥ
用の入あり らまー（うつぼ 藤原の君）もらへいれとともうちまきによねいるべー（後拾）雜上神祇 云々歌二
つあんいるべきといひけれバ云々長能 補（後拾）雜四顯綱「おやつゥおつくまの神のた
めあらバいくつゥあへのかにいるべき（宇治拾）九ノ十二おのづゥらいる事もやある
とてくれあるをゝーのむゥまぞ一つあるを

いる 射（仁徳紀）四 あづさゆみ伊枳羅牟（イキラム）と いる（万）廿六 いるまとかさゝ見るにさやけし（古）春下 をつね「梓弓春立ぬより年月のいるがでとくもおもほゆる哉」

つる（万葉）三ノ卅四 いつる矢を い給ふ（榮歌合）七權大納言左衛門のかうおとの射給ふをとかさゝに心よせの人ねんどけり いころを いらる いん（竹とり）露も物そらにゝけらゞふとい殺し給へ云々あの國の人え戦ゝぬるより弓矢にていられ下云々ねんどていんとそれともをゝらざまへもきけれゞ いふせらる（かけろふ日記）中 おふ〳〵いふせられぬとて いさす（源 夕のを）上、九 十八 例の小弓いさせて見るべゝりけり いちらを（宇治拾）十二、廿四 射ちらされてにげていわけり いもらふ（同）廿五 こゝにて。ゝくいもらひてとり参らせて候ひつるなり いちらを事也

いる 鑄（夫）卅二 祝部成仲「てる月を浪の上にて見る時ぞまことの鏡いる心ちをる いさを（拾）賀 鏡いさせ侍りけるうらに鶴のゝゝをいさせ侍りて いせ 歌（新勅）雑 おき人の鏡を佛ゝいさせ侍りけるに 忠岑 歌

いる 沃（儒門事親）一ノ廿七 沃以寒水（長秋記）元永二十一 廿二日自宮御使來云々 御二禁有增氣令加灸治給者云々 自今夜可奉沃水云々（かけろふ日記）中下 夢にさゞ腹の内あるくちをゝありきて肝をもむ是を治せんやういれもてに水をんいるべきと見る

いれ（文粹）盡露其膽（チイン）以沃（イヨ）朕心 いさせ給ふ い奉る（榮根合）一 内の御ゝきこの事猶怠らせ給ゝねゞいゝにとむづゝ〳〵うおぼ〳〵めし云々 日頃のすぐるまゝに猶水をどいさせ給ひてよゝらんと申せゞ其作法の御〳〵つらひ〳〵てい奉るいと寒き頃さへがたげゝ見えさせ給ふ いゝく（枕）十二、廿三 白き水いゝけさせよともいゝぬゝをありくさまの云々（源 まきゝしら）十五 俄ゝおきあがりて大きおるこの〳〵たおりつる火とりをとりよせて殿のうへ〳〵ろによりてさとい いる 煎 いり（うつを 國ゆづり）上、七 藤壺にも鮎ならぬいをいりて参り給ふ〇 いる めて入 たえいる きえいる なごのたぐひ め た き〇部ゝ出そ余もおしてしるべし

いるゝ 江豚（和名）十九、鯨飾伊流加 一名江豚

補 いるさの山 いるさのゝさいゆくさゝくさゝへるさゝおどのさゝ同じ（新古）春下 公經「春ふゝくさづねいるさの山のもにその見〳〵雲の色ぞのこれる

いを 魚（和名）十九、魚 宇平俗云伊遠 水中連行蟲之總名也（源 ゝきゝ）十六 あら海のいゝれるいをの姿（兼盛集）「さゝこひいいをおき淵の釣おれやうけもひゝれでやゝぬべらおり 補（榮衣の球）さま〳〵のいをどもゝてまゐりされどすべて御そをひきかづきてきこしめをべき御けしきもおゝ（同 晩待星 鵜魚）うのいを、くひてさふらひけるを

（職人盡歌合）いをうり　魚賣

いさけ　をさあきをも又物事に思慮あきをもいふ　いさけて（源もみちのう）廿心あげにいさけて聞める
いおどさふらふ人々も聞えあへり（同夕ぎり）卅四猶いといさけてつよき御心おきて
のあうりける事と云々　いさけさる（同ゑ合）七ゆめにもいわけさる御ふるまひあら
ばこそ云々（同やさる）廿三またいわけさる
榮かゝやく藤つぼ）いさけさる事なく
いさけなし　前に同　いさけなき（六帖）三「あふ事のうさよせにそる網のめにいさけな
きまでこひうゝりぬる（夫）卅五知家　世中い
ねてそあうるれ（源きりつぼ）十二「いさけ
つくゝ）四などてわが心のわうくいさけな
ていさけなく（同きりつぼ）廿四いさけなく
三いわけなく打出聞えさせ給ふお（同ゑうお）十上、四姫君い云々わび給へりかの紫
のゆうりさづねとり給へり〳〵折おゞ〳〵出るにかれいざれていふうひあり〳〵をこれ
いといわけなくのさ見え給へゞ　いさけなうりける（同夕顔）五いさけなうりける
ぞに

いさと　鯨（和名）十九鯨以和志　補（蒼聞）十六、いさ〳〵あそせて褒て
いさ　五十。子生れて五十日めにいさふ（拾）雜賀　大貳國章うまでのいさりでてう
日　事也又百日にもいふ也（松ゆ）十
ゝて歌を繪にうゝ、せ（後拾）賀　故第一親王のいさ參らせけるに（源ゑをつくし）十四五
月五日はぞいさにいあさるらんと人〳〵れをうそへ給ひて（同さ〳〵き）廿八御いさに
もちひ參らせ給へんとて（榮さつ花）四十九「いさにいうべのぞへやるべき八千とせ
のあまりひさ〳〵き君う御代をぞ（枕）八ノ心もとおき物、いつ〳〵と待出さる兒の
五十日も、うおどのゝどにありさる行末いと心もとおし（榮花山）十五御いさやも、
ケあど過させ給ひていさゝう、つくしうおいしまをも
いさ　鳥賊（和名）十九、十二　烏賊伊加　いさのくろさ（同）十四烏賊墨、背有一大骨腹中有墨以加之久呂美
いが　栗刺（和名）十七栗刺久利之伊加　くりのいが（枕）八廿おろ〳〵き物、くりのいが
補　いさ　衣架（拾愚）上「からころもうくるいさの字音よめり和名抄
ひくよい衣架ミソカケと訓めり　此歌
いさゞり　ドノクラ并又カギリモナキ心也（六帖）六上「いさゞりふる雪なれば
をまづそむくらん（後拾）冬　國房「いさゞりなげきをつめる身なれゝをあげ鳥ゐなの〳〵を山道
まどふらん（源賢法眼集）「いさゞりなげきをつめる身なれゝをあげ鳥ゐなの〳〵を山道

營なるらん（源さゝきゝ）十きんだちのかゝなき御えらびにはまゝていりもりの人りはたぐひ給はん（同玉りつら）廿四今は天下を御心にりけ給へるおとゞにていりぞりいつりしき御中に（同夕きり）十一いりもりちゞにくさけ侍る思ひにたへぬぞや（新六帖）六知家「世にしあらば行りふ人もいりもりり蓬の門に市をなさまし

いりもりりは（カギリモナキ也）（源夕りゆ）四十七「とはぬをもなどりととはでゆどふるにいりもりりは思ひみざるゝ（同東や）十七人數にもおぼさゞりしりもいりもりりは心うくつらかりし

いりに（ドウ、又ドノヤウニの心也）（古）物名貫之「足引の山べにをれはしら雲のいりにせよとりもるゝ時なき（源きりつゆ）十一いりにもべきわざにりともとひあはもべき人さになきを（同さゝきゝ）四十九君はいりにたもりなさんと云々（同夕りゆ）廿九まづ此人はいりになりぬるぞとおぼも御心さるぎに（同）卅九いりになり給ひにきとり人にもいひ侍らん（古）春下ミつね「雪とのミふるさにあるを櫻花いりにちれとり風のふくらん（拾）戀五「うらミての後さへ人のつらりらばいりにいひてりねをもなりまし（同）戀四道綱母「なげきつゝひとりぬる夜のあくる間はいりにひさしき物とりはしる（千）雜上顯方「さえぎさつ室の八島の煙哉いりにつきせぬ思ひなるらん

いりに（ドノヤウニカサヅの心也）（重之集）「花の上にちりくる雪のこれならばいりにうれしき命ならまし（源夕のゆ）廿六内にいりにもとめさせ給ふらん云々六條ことりにもいりに思ひミされ給はん（同）卅八右近は屏風へざてゝふしたりいりにこびしりらんと見給ふ（同さりき）十二まして旅のそらはいりに御心づくしなる事おぼりなん（枕）三ノ廿四瀧は、とゞろきの瀧はいりにかしまくおそろしりらん（大和物）一ひさしくせうそこなども物せざりけるいりにおぼつりなく思ひつらん補（源若紫）いりにもりくしき御いらへきこえさせ給はんとてうちわらひてゐさり（同若菜）下云々こり心とつみあるにはなさになりにしなどいまおもへばいりにりどあることなりけり。（拾遺）云今案にいりにといひてけりととめさるてにをも心得ゞさしいりにもといへばかなへば其心と見るべき歟いづくの露のりゝる袖なりの類歟。（小櫛）に云此てにをはの事拾遺にいへるさること也たゞし是は別に一種のいひさはにて例あること也いりには俗にいりばりりといふ意也。廣足云此てにをはの一格の事詞玉緒補遺附錄に多く例を出していへる說を考ふべし是は轉語にてにをはの結びをさゝミこミて轉り行語也

いりに（ドウヂヤトいひりくる詞也）（万）七ノ廿一「大海の波はりしこしなりれどもかミをいはひて舟出せばいりに（後撰）戀五俊子「思ふてふことのもいりになつりしな後うき物と思はぎ

もがな(拾)雜春、大伴像見「故里のならしの岡に時鳥ことづてやりきいりにつげきや(枕)十二、廿いりにさとやりはなり給へりや(古)雜下、をのゝさゝき「都人いりはとゝへゝ山高ミそれぬ雲ゐはとぶとこゝへよ(枕)三ノ廿一いりはとゝへばさとる事ども申そお

いりお 何故ナゼニの心也(六帖)一上「春だはもありし心を夏衣いりおうそさのけふまさるらん(玉)雜四謙德公「郭公こぞ見し君もなき宿にいりになくらんけふの初聲(源とりな)上八いりはの給へする事おりとあやしく思ひめぐらはに(同 夕ぎり)十三忍びやりに打ぜし給へるもかさへらいさくいりはいひつる事ぞとおぞさるゝにげおあしう聞えつりしなど云々

いりに〳〵 ドウヂヤ〳〵也(源ーひがもと)十八いりに〳〵と人奉り給へど(枕)一ノ十そこにさふらへんへいりお〳〵といへば(同)一ノ廿三いりに〳〵と誰もとひ給へどもいへぜ(榮とり枝)廿一かんのとのゝたゞにもおへしまさねばいりは〳〵といミドき事どもをぞさせ給ひける

いりにとりや 何トカ(ナン)の心也(源幻)十六、葵の事をとり給ひていりはとりや此名こそとはれにけれどの給へば(枕)五ノ十無名といふ琵琶の御ことを云々こそが名よいりにとりやなど聞えさそるに補(源鈴虫)九いりにとりやいでおもひの外なる御ことにおそ(狹衣)おり

めは見おこせ給ひていりにとりやのこりゆりしきひとりでとかなとのさまふを

いりにり ドウの心(万)五ノ六「家にゆきていりにりあがせん枕つくつまやさふしくれもそゆべしも(新古)別實方「とゞまらんことは心にかなへどもいりはりせまし秋のさそふを

いりにりは 次に出せる詞をふくめさるいりゞはは同(枕)九ノ五我をば思ふやと問はせ給ふ御いらへにいりはりはと啓するはあはせて

いりにぞ ドウメ又ドウヂヤ也(後撰)春上、中納言長谷雄「春雨にいりはぞ梅や匂ふらん我見る枝はいろもりもらぜ(後拾)哀傷さがミ「とはゞやと思ひやるざお露けきをいりはぞ君が袖はくちぬや補(榮衣の玉)いりにぞさむくやものし給ふとのさまはばれば

いりはぞや 是ハドウヂヤゾヤ也(後撰)戀二あひしまて侍りける人のもとよまひさしくとはぜしていりはぞやまさいきさるやとたはふれて侍りければ(榮とり枝)十七かうでいりはぞやきのふの宮の大饗はいりゞありしととひ聞えさせ給へば

いりはぞや ドウデアラウヤラ又イカゞシキ心也(源花のえん)八父おとゞなど聞てことゞしうもてなされんもいりおぞやまざ人のありさまよく見定めぬそどはとづらはしりるべし(同あふひ)十七いりはぞやもある世哉(同)廿三、六條御息所の心をいへる所にいとそどへはけるも心

ぐるしくまさけぢかくて見奉らんにいかにぞやうさてあらんとれそゆべきを人の御さめいとほしう(同ゑかな)下、四十四はじめつ方あなさまてほの聞しいかにぞやありしをいとこよなくなりにけり補(源螢)九五日にいうまものおとゞに出給ひけるついでにまさり給へりいかにぞや宮ハ夜やふかし給ひしいさくもならし聞えど(齋宮)「いかにぞやなのりそれかととハんにもさすれるさとやあまいつげまし(落くそ)さちハき大将どのにまゐりされハ大將詞いかにぞやかのことハ是ハタヽイカコト問フコト也(同)小將ゑばしゐされいかにぞやいきやせんとする是モ同(山家)「いかにぞやいひやりさりし方もなく物をおもひて過るころ哉是ハさゞドウトモいひやり方もなくの意也

いかにぞや

イカヾシキ心也(榮月の宴)ミやを所もきよげにおもそれどものおい〳〵しくいかにぞやおもして(隆信)かきつさふるにつけてことざまいかにぞやうちまかせぬさまなれど(散木)此歌ハいかにぞやある男女のうらミさるに似さりとてつかもさゞりける(枕)七ノ廿四いひいでられぬハいかにぞやなどいふをきゝて是ハドウ云コトヅの心

いかにやいかに

ドノヤウニを重ねてつよくいへる也(拾)雜上「世中をかくいひ〳〵のもて〳〵ハいかにやいかにならんとそらん

いかにして

疑の心ドウシテ也(古)秋下とし行「白露のいろハひとつをいかにして秋の木のもを

ちゞにそむらん(枕)九、六「いかにしていかにしらまし僞をそらにさゞその神なかりせば(同)一、三かゆ杖の所にいかにしてけるにかあらん打あてさるハ(夫)廿六「いかにしていかによからんをの山の上よりおつる音なしの瀧

いかにして

願ふ心ナニトヅシテ也(後撰)戀二忠ミね「ひとりのミ思ふハくるしいかにしておなど心に人ををしへん(拾)戀一「いかにしてしきし忘れん命さにあらばあふよのありもこそそれ

いかにしてかハ

ドナイニシテ也(後撰)戀二(拾)戀五「あやしくもいとふにもゆる心かないかにしてかハ思ひやむべき(拾)さも(源藤のうらも)十七今ひとさび見奉るよもやと命をさへしうねうなしてねんゞけるをいかにしてかハと思ふもかなし

いかにしても

願ふ心也(狹)一下卅五いかにしても死ぬるまさもがなと思へばかく五六日にもなれど水をさにとりよせぞ

いかにも〳〵

ドノミチニモ〳〵何ニセイの心也(源しひがもと)十二ミづからのことにてハいかにも〳〵ふかう思ひしる方の侍らぬを(同あつまや)十七物思ハしげにおぞしたるを見ればいかにも〳〵二心なからん人のミこそ云々(榮楚王のもめ)卅一たゞいかにも〳〵心ざしのかぎりつかうまつりぬべかんめるなんうれしき

いりにせん（ドウセウ也）（万）四廿六「目にハ見て手にハとられぬ月の内のかつらのでとき
いもをいりにせん（齋宮集）「もりなくて雲となるとも山彦のハこさへばりりハそ
らにいりにせん（愚案抄）十三催馬樂山城瓜つくり我をネしといふいりにせん云々（万）十一、
廿七作者不詳（拾）戀二人丸「そき板もてふける板間のあハざらばいりにせんとりさげねそめ
けん（万）そき補（續拾遺）雜下鴨長明「いりにせんつひのけふりの末ならで立のぼるへき道
もなき身を（ミの丶家つと折添）ニ云新古今集の頃ハ初句いりにせんとおける歌い
と多きをおネくハかなへりとも見えざるを此歌などハ此詞よくかなへり廣足按ニいりせふ
んと初句ニいへる歌（新古）藤原家隆朝臣「いりにせんこぬよあまさのネと丶ぎにまさゞとおもへ
ばむらさめれ空（同）女につりハしける實方朝臣「いりにせんくめぢの橋のなり空にわ
さしもたてぬ身とやなりなん（同）戀三相摸「いりにせん葛のうら吹秋風に下葉の露の
かくれなき身を（同）増賀上人「いりにせん身をうき舟のにをおもみつひのとまりやい
づくなるらん新古今ニハ此四首のみ也（拾）戀一「いりにせんいのちハかぎりあるものとこひハ
さそれに人ハつれなし（新勅）戀五、式子内親王「いりにせん夢路にだにもゆきやらぬむな
しき床の手枕の袖（同）雜二、和泉式部「いりにせんあめのしさこそ住うけれふれば袖のミ
まなくぬれつゝ（新後拾）戀一頼兼「いりにせんネどなき袖のしがらみにつゝミなれて

もあまる涙を（續後拾）雜下慈鎮「いりにせんかさねし袖をりさしきてなミさにうくハ
枕なりけり（同）戀三、鎌倉右大臣「いりにせんいのちもしらぬまつ山のうへこに浪にくち
ぬおもひを（同）雜中「いりにせん身をうき雲の山のもにひ思ひささめぬ夕ぐれの空
（玉葉）戀二俊成「いりにせんいりにりせましいりにねてれきつる今朝のなでりなるら
ん（新葉）「いりにせんさらでもかをむ月影の老のなみだの袖にくもらば（同）「い
りにせんたのむ日吉の神無月てらさぬりげの袖のしぐれを（續後撰）戀二定家「いりに
せんあまのもしネ火さえぬ立けふりによる浦風もなし（拾玉）「いりにせんなぐ
さむやとて見る月のやがて泪にくもるべしやハ（狹衣）「いりにせんいもぬ色なる
花なれば心のうちをしる人ぞなき此詞の事廣足り説ハ窓の小篠ニいへるを見るべし
いりにせん〳〵（狹）三上、四十二いりにせん〳〵とまどひ死いりて泣いりてふせり いり
にせよ いりにせべき いりに の所ニ附そ
いりにせまし いりにせんをのべていふ也（源ありし）初いりにせましかゝりとて都にりへらん事
も云々人さらハれなることこそまさらめ
いりネりぜ 上野いりネの風をいふ（万）十四十四（拾）廿九「いりネ風吹日ふりぬ日ありといへどあが
戀のミし時なりけり

いかり 碇（和名）十一 碇海中以石駐舟曰碇伊加利（万）八 「大舟のかとりの浦に慍（イカリ）おろしいかゐる人ゝ物思ハざらん（夫）卅三中務卿みこ 「けふの日ハいかりをへよと舟人のつなでのこさり風もこそまて **いかり繩**（拾）一 戀 「湊出るあまの小舟の碇なハくるしきものと戀をしりぬる **いかりの綱**（新六帖）三 信實 「沖つ舟おろせ碇のつなつよみあやふゝらぬも猶そあやふき

いかる 怒（拾）物名（躬恒）「ことぞともなきに、たゞよさりをくる人のいかるらにけやしかまし **いかり**（源タきり）十九 僧詞 惡らうれうねき物なれバでつゝやうにまつれさるむゝな物なりと聲ハられていかり給ふいとそくしき律師にて **いかり**（体）の詞（同）廿 人の御いかり出來ぬながきよざしとおりなん **いかれる**（同もちのゞ）廿七 たゞいまどういかれるけしきにもてなして太刀を引ぬけバ（同ゑゝき、）十六 あら海のいかれるいをの姿（同とこ夏）廿五 いとさうがちにいかれるての書也 補 **いからゝ**『』（字治）八ノ十二 目をいからゝしおさめづりをし（同）九ノ十六 こそ〳〵と入くるまゝに目をいからゝして

いかるが 班鳩。鳩の一種也（和名）十八 五 鵤伊加流加 貌似鴿而白啄者也兼名苑注云班鳩和名同上 皆大尾短者也（万）十三 末枝にもち引ゝけ中つ枝に伊加流我ゝけをづえにもめをゝけ云々。いかるが、雄、共に枝よゝけ置て媒鳥とする也（夫）廿七 寂蓮 「春の日ハのどゝよかにもむ山里に物哀れなるいかるがの聲（拾）哀傷 「いかるがやとみの小川のさえバこそこの大君のこなをこれめ 是ハ太子の宮所をいへる也とぞ

いかゞ ドウの（古）俳諧 與風 「身ハにてつ心をざまもむふらさゞつひまいかゞあるとしるへく（源ゑゝき、）廿 いかゞ思へるとけしきも見ゞてら（竹とり）御心ちハいかゞおぼさるゝと問へバ（同）いかゞそべきとおぼつかなくて召わづらふに（うつを 櫻の上）下、十三 「人しれぬむもふの神をおるべにていかゞそべきとおぼく下ひも（竹とり）いかゞ、しけんもやき風ふき世界くらかりて（枕）二 鷄をとらへてもちて云々かくしおきさりけるがいかゞ、しけん犬の見つけて（同）二、廿 いかゞいひやるべき（同）廿、三 いかゞいひつる（土佐）歌云とぞいへる海まて子の日の歌にてハいかゞ、あらん（狹）二、下、廿 てハいとゞゆかぬ三河の八橋ハいかゞ、あら人（貫之）人まて文やりける女のいかゞありけんあまた、びゝへりでともせざりければ云々

いかゝせん ドウセウゾ、マヽ、ヨドウセウゾ 雨樣（源タゞゃ）卅七 馬にて物せんとの給ふをいとたいしき事とハ思へとさおぼされんまゝにいかゝせんもやおもしまして夜ふけぬさきにゝへらせおハしませ（同末つむ）四 あないとゝや人の聞思ゑん事もありい

ける世にしたゝ名でりなきわざいゝゝせん

いゝゝ（ドウカトあやぶむ心也）（古今）戀四そせい「秋風に山の木のもとのうつろへば人の心もいゝゝとぞ思ふ（源あふひ）卅五「秋霧に立おくれぬと聞しよりしぐるゝそらもいゝゝとぞ思ふ（同ほゝ紫）廿三御むゝへにもと思ひ給へつれど忍びさる御ありきにいゝゝと思ひむゞゝりてなん

いゝゞ（ドウマアの心也）（古）物名、ゝねゝのおそきゝ「梶にあさる波の雫を春なればいゝゝさきちる花と見ざらん（新撰）戀六「うらむともこふともいゝゝ雲井よりもるけき人をそらにしるべき（源ゑゝきゝ）八いゝゝ思ひの外にをゝしゝらさらん（同ほゝ紫）十七かくまての給ひ聞えさせるもあさくゝいゝゝとの給ふ

いゝゝ（ドウヂヤ也）（同かしゝき）いゝゝ句御心ちゝさわやゝになりにさりや（枕）八ノ十六碁もん侍るやまろもうさんと思ふゝいゝゝ手ゝゆるし給ゝんや

いゝゞゝ（ドウマア、ドウノマア也）（源ゑゝきゝ）五それにしゝあらゞとそらにいゝゝおしもゝりて思ひくださん（同）十一いゝゞゝくちをしゝらぬ（同）四十六たがふべくもの給ゝざりし物をいゝゞゝさゝ申さん（同タゝネ）十三いゝゞゝおろゝに思ひ聞えん

いゝゞゝ（右ゝおゐじ但▲の所にドウマア▲ありゝざらん。ドウヌマア▲思ゝざらん。ナニシニ▲つゝまん。うれしゝらざらん。▲せざらん。▲おぼえざらん。▲めてざらんなどやうの心を含めさる也余も前後の文にて心得べし。句ゝしてよむ也）（落くぼ）一などしたづ心なくありき給ふぞといへばいゝゞゝネどもなき所に人をそそる奉りたれば人やふとくるとてさゞありくぞゝしといらふ（同）一いとネしうおぼせやといへばいゝゞゝといらふ（源蓬木）卅七伊よの介ゝかしづくや君と思ふらんな答いゝゞゝさゝくしのしゆう（主）とこそ思ひて侍めるを（同末つむ）廿九我にゝつゝむ事あらゞとなん思ふとの給へばいゝゞゝミづゝらのうれへゝかしこくともまづこそゝ（同玉ゝつち）十一さゞ君をば后の位におとし奉らゞ物をやおどいとよげよいひつゞくいゝゞゝかくの給ふをいとさいゝひありと思ひ給ふるを云々（かけろふ日記）上、下御禊のいうぎちゝくなりぬこゝにも給ふべき事これ〳〵とあればいゝゞゝとてしさゞぐ（同）中、下むゝしこゝゝ見給ひしゝおぼえさせ給ふやと問へばいゝゞゝいとたしゝに覺えて云々（枕）九、一かぎりなくめでさしと見しらぬさとびこゝちにゝひゝゞゝ（同）七、七もしおやう官のうちあてえさせ給へるゝといへばいゝゞゝといらふ（同）六、一しげい舍春宮に參り給ふネどの事いゞゞゝめでさゝらぬ事なし（宇治拾）八ノ八十いつまぬし殿ゝをゞミ奉るやといひければいゝゞゝこのさらゝもをがミ奉る

いゝゞゝあらん（ドウシテソウハセウヅ也）（源ほゝ紫）卅八くるしげに思ひされば（源詞）さりともか、

る御ゐどをいかゞゝあらん猶たゞ世にしらぬ心ざしのゐどを見ゝて給へ

いかゞゝせん（ドウセウツ、マヽヨ、シカタガナイの心也）（竹とり）たゞむかしき風ゐまかせてありく命しかばいかゞゝせんいきてあらんかぎりかくありきて蓬萊といふらん山にあふやと云々（同）さらばいかゞゝせんかさき物（イ事）なりとも仰ことにおさがひてもとめにまからん（源ゆゑ紫）一老かゞまりてむろのとにもまかんでぞと申たればいかゞゝせん忍びて物せんとの給ひて（同よもきふ）五思ひあなづりていひくるを例の女房いかゞゝせんそこそゝよのつねの事とてとりまぎらゝしつゝ（同夕きり）五十五いかゞゝせんなき人にそこしあさきとがゝおゐせていつありそめし事ぞともなくまぎらゝしてん

いかゝゝせんゝ（いせ物）十五段女かぎりなくめでさしと思へどもさるさがなきえびそ心を見てゝいかゞゝせんゝ

いがゝゝせんに（右ゐおなゞ）（源うつせみ）八ゐいの人をさづねよらんもかばかりのがるゝ心あめればかひなくをこにこそ思ゝめとおゐそかのをかしかりつるゐかげならばいかゞそせんに（古本如此）おゐしなるも例のわろき御心あさゝなめりかし（同よもきう）廿一いとなつかしき香したるを奉りければいかゞゝせんにきかへ給ひて（同あげまき）卅八いとゐしく思給ふるにかなゝぬ身ころおき所なく心うく侍れ猶いかゞゝせんにおゐしよりぬ（更しな）七十あづまぢよりゝちかきやうに聞ゆればいかゞゝせんにてゐどもなく下るべきことゞもいそぐに

いかゞゝせまし（初のいかゞゝせんにおなじ）（拾）雜戀「世の中ゝいかゞゝせましたげ山の青葉の杉のしるしだになし

いかゞゝそべき（ドウモシカタガアルマイなり）（千）秋下右大臣「山おろしに浦づさひそる紅葉哉いかゞゝそべきそはの關守

ISSEIDO
東京 神田 誠文堂

増補雅言集覽卷之一　終